

講演録

日本文化人類学会 第50回研究大会記念シンポジウム
人類の道徳性と暴力性をめぐって
—隣接諸科学との対話—

1. シンポジウムの概要

日 時：2016年5月28日（土） 15時05分～18時05分

会 場：南山大学名古屋キャンパス S棟（S21教室）

講演者：長谷川眞理子氏（総合研究大学院大学・副学長）

「他者を感じ、他者を理解する心の進化的基盤」

山極壽一氏（京都大学・総長）

「言葉以前のコミュニケーションと道徳の起源」

内堀基光氏（放送大学・教授）

「文化人類学からの応答：人類の道徳性と暴力性をめぐって—隣接諸科学との対話」

司 会：後藤明氏（南山大学・教授）

2. 講演の記録

（1）南山大学学長の挨拶

【司会】 日本文化人類学会第50回研究大会記念シンポジウムを開催したいと思います。私は南山大学の後藤と申します。本日の司会を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。開会に先立ちまして、南山大学学長のミカエル・カルマノ先生のほうからご挨拶をいただきたいと思います。それでは学長、よろしくお願いいたします。

【カルマノ】 おはようございます。南山大学学長のカルマノです。実はこの南山大学の卒業生でもあります。ただ、卒業したのは42年前の話です。私も多少変わった人間で、カトリック教会の司祭です。たぶん皆さんもご存知だと思いますが、南山大学はカトリック大学です。ですから、設立母体は神言会なのですが、私はその一員として、今、学長をやっています。

私の修道会は、もう設立早々から人類学と言語学に非常に力を入れたわけです。ですから、うちの修道会の宣教師はどこに行っても、まずその国の文化、そして言語を研究してから、活動に取り組みます。どちらかといえば、マーケティングのツールです。何かやろうと思うと、ちゃんと対象とする人のことを知らなければ何もできないですから。ただ、

これは単なるマーケティングではなくて、実際に文化人類学、言語学は、やはり人間にとって、互いの理解のために必要だと思うのです。

ですから、この南山大学も、設立当初から「人類学・民族学研究所」をつくったのですが、これが今、「人類学研究所」となったわけです。そして人類学博物館もありますので、近くに来たときは、ぜひ見てください。私も若いとき、自分の神学の一環として人類学を勉強したことがあります。だからこそ、この日本文化人類学会の第50回研究大会を南山大学で開催できるのは、私にとって非常に光栄だと思っています。

特に今日のテーマは「道徳性と暴力性」です。これこそ、私にとっても、カトリック信者の一人として非常に大きな問題です。人間というのは、本当に道徳性を持っているのか。それとも、生まれつき暴力性を持っているのでしょうか。たぶん結論は出ないと思うのですが、やはり文化人類学、自然人類学のほうから話し合ったほうが、もっと深い理解があるのではないかと私は期待しています。

このような名誉ある第50回研究大会を南山大学で開催できることを感謝して、私の挨拶とします。今日は本当にありがとうございます。

(拍手)

(2) 趣旨説明

【司会】 では、このシンポジウムの趣旨をご説明させていただきます。日本の文化人類学は、第二次世界大戦後、アメリカの総合人類学を一つのモデルにして、文化人類学、考古学、言語学、形質人類学を統合する形で出発いたしました。南山大学は、文化人類学、考古学、言語学の専門家からなる人類文化学科で、かろうじて総合的な人類学の枠組みを維持しておりますが、それぞれの分野の専門化が進み、隣接分野との対話がかつてほど盛んではないように思われます。

文化人類学の目標は、あくまで人類、あるいは人間の理解であることは変わらないと思いますが、1990年ごろから、認知科学、進化心理学、脳科学、遺伝学、認知考古学、あるいは心の哲学などの分野で人間の行動と認識に関する目覚ましい展開が見られるようになっており、今こそ文化人類学もそのような分野に伍して、議論の一翼を担っていくべきだろうと考えます。

そこで今回、あらためて原点に立ち返る意味で、日本文化人類学会研究大会50回を記念するシンポジウムを企画いたしました。その基調テーマは、「人類の道徳性と暴力性をめぐって—隣接諸科学との対話—」であります。

これまで文化人類学の領域では、人類社会が持つ共同性や利他性をめぐって、文化を学習装置と捉える立場、文化を人間の行為を規制する価値体系と見る立場、社会の次元に注目して互酬性から説明する構造論的立場、あるいは、実践やエージェンシーに注目する行動論的な立場などから問題が論じられてきました。同様に近年、隣接科学でも、人類の行動に見られる利他性や道徳性などが問題として論じられてきております。

ところが他方では、紛争やテロリズムに見られる人類の暴力性や憎悪の連鎖は、21世紀

になってむしろ深刻化しつつあるという現状もあります。果たして人類社会はどのような方向に向かおうとしているのか、途方に暮れることも度々であります。暴力とは、人類が発生した当初から伴っている本来的な特徴なのか否か。もしそうであるなら、類人猿はどのようなのか。あるいは、どのような状況で暴力性のスイッチが入ってしまうのかなど、われわれが今、問わねばならない問題は山積していると思います。こうした状況において文化人類学は、隣接科学との対話を通して、どのような人間理解を提示し得るのだろうかと思えます。

このような問題の糸口を探すために、本シンポジウムでは、文化人類学を専門とする研究者と、隣接科学、特に行動生態学や進化心理学、また、霊長類学や人類進化学の研究者との対話を試み、このような問題に対し、新たな視座を提示することを目指すものであります。本日は、まず文化人類学の隣接分野である行動生態学および霊長類学の研究者から、道徳性と暴力性についてご講演をいただきます。その後、文化人類学からの応答を行い、総合討論を続けたいと思います。

(3) 講演1：長谷川真理子 氏「他者を感じ、他者を理解する心の進化的基盤」

【司会】 では、最初の講演者の長谷川真理子先生をご紹介します。長谷川先生は、東京大学理学部のご出身で、理学博士であります。東京大学理学部助手、早稲田大学教授などを経て、総合研究大学院大学教授、現在は総合研究大学院大学副学長という要職に就かれております。ご専門は行動生態学です。

長谷川先生は多くの著作、単著の他に、長谷川寿一先生との共著や共編著も出され、また、道徳性や利他性をめぐって、各分野の第一人者との対談や座談会を通して広く活躍されております。近著では『思春期学』があり、青少年の心の問題などにも光を当て、発言をされております。それでは長谷川先生、よろしく願いいたします。

【長谷川】 今、ご紹介にあずかりました長谷川でございます。今日はどうぞよろしく願いいたします。私は、出身は東大の生物学の中の人類学で、自然人類学の出身なのですが、いろいろと人生の中で紆余曲折があり、人類学会にも霊長類学会にも入っております。昔は入っていたのですが、学部のころか何かに民族学と人類学の合同大会があって、それを最後に、やめになったときに、まだ学生でございました。それ以来、文化人類学の方々と学会で一緒になるということはないので、今日は本当に、もしかしたら40年ぶりぐらいかもしれないと思っています。

今日は「道徳性と暴力性をめぐって」なのですが、私は、自分のオリジナルの研究としては殺人の研究と児童虐待の研究があって、特に暴力のほうをやっています。最近いろいろ考えていることの中で、他者を理解する心の進化的基盤ということについて、私自身が今、最も関心があり、これが全て、いろいろな人類、人間、サピエンスの特徴というものをまとめているところではないかと思っていますので、特に他者の理解と道徳性のほうを話したいと思います。

私は、初めは野生のチンパンジーの研究をしていたのですが、それからもっと、動物行

動一般ということで、シカとかヒツジとかクジャクとか、いろいろヒト以外の動物の行動生態の研究をしていました。そのうちに、やはりまた人間に興味に戻って、1990年代ぐらいから、ヒトの研究に戻ってきました。

1980年代の後半から、いわゆる進化心理学とか人間行動進化学という部門というか分野が興隆してきました。それが生まれてくるあたりを目の前に、発展してくるあたりを見てきたのですが、1980年代の最初の人間行動生態学とか進化心理学のときには、ヒューマン・ユニバーサル、遺伝的につくられた人間の生物学的、普遍的基盤を探ろうということがすごく興味の焦点にありました。その当時の血縁淘汰の理論とか、親の子に対する理論とか、動物の行動生態学で非常に成功している理論、それは今でも成功していますが、そういう理論を人間に応用して、人間の場合にも同じように説明できる何らかのヒューマン・ユニバーサルを追究しようという動きでした。

そのころ、文化の問題というのは、みんな、ほとんど興味がなかったんですね。1996年だと思いますが、私がわりと最初のころに参加したアメリカの人間行動進化学会 (Human Behavior and Evolution Society) のポスターには、“Human universal machine” というのが目の前に書いてあって、そのはるか遠くに文化が火や花として、ちょこちょこつと円形に描いてあって、やはり “Human universal machine” が重要なのだというポスターがありました。

ですが、今は随分変わってきたと思います。なぜ生物学的ヒューマン・ユニバーサルの基盤を求めて文化を扱うことに踏み込めなかったかということ、文化をどう扱うか、当時は人間行動生態学では解決できなかったからです。ところが、やはり人間の人間らしさというのは文化と言語が可能であるということ、これが、連続はしているものの、人間を新たな別の種に押し出したものだということが深く理解されるようになりました。そうすると、なぜ文化と言語ができるのかということが重要になり、文化と言語をどこから生物学的に攻撃していくかということが課題になったわけです。

文化というのは、人々の共同幻想によってつくられる直接的な人間の環境だということです。そして、文化がなぜ可能かということ、言語というものが人々の共同幻想をつくり出して、媒介して、広めることができるからだということです。

言葉自体もそうですが、言葉が紡ぎ出す文化というものも、みんなが同じことを了解しているというのは幻想にすぎないんです。人の心をつかみ取って見ることはできないですから。だけれども、実際、大体同じことを了解しているということが生じるので、その文化環境というものが人間にとって、自然環境より前に直接、一番接する環境になるということです。だからヒトは文化環境に適応するようになるのであって、文化というものが非常に重要なものとして、言語を媒体に、また言語以外にも媒介されて、伝わっていくんですね。

そうすると、この共同幻想を可能にする生物学的基盤は何かということになるわけです。それは心の共有ということです。これも、しゃべりだすと何時間もかかるのですが、自分には「心的世界」があるということです。意志があり、意図があり、欲求があり、世界があり、認識があります。自分にはそういう心的世界があり、それに基づいて行動している

のだという認識があります。それと同時に、自分と同じではないけれど、他者にも同じような心的世界があって、それに基づいて他者は行動しているのだと思うわけです。

それが、お互いにバラバラにそう思っているのではなくて、「お互いにそうだね」ということを了解しているのだということです。その心的世界が共有されることにより、共同作業が可能で、一緒に暮らして、その文化を改良したり発展させたりしていくこともできる、いわゆる蓄積的文化というのが可能になるだろうということです。

これはよく私が使うのですが、これはうちの犬で、キクマルちゃんという、親ばかりのようにかわいがっている犬です。誰か小さい子どもがうちの犬を見ると、「ワンワン！」と喜んでくれますよ。それを聞いたお母さんが、やはりキクマルちゃんを見て、「ああ、そうね。ワンワンね。可愛いわね」と言うんですよ。

この簡単な、非常に素朴な子どもと親のやりとりというのは、実はものすごく複雑な心的過程が必要なもので、これはチンパンジーはできないし、やらないし、やりたいとも思いません。「あ、ワンワン」「うん、そうね。ワンワンね」とうなずくという、これはものすごく大変なことなんです。

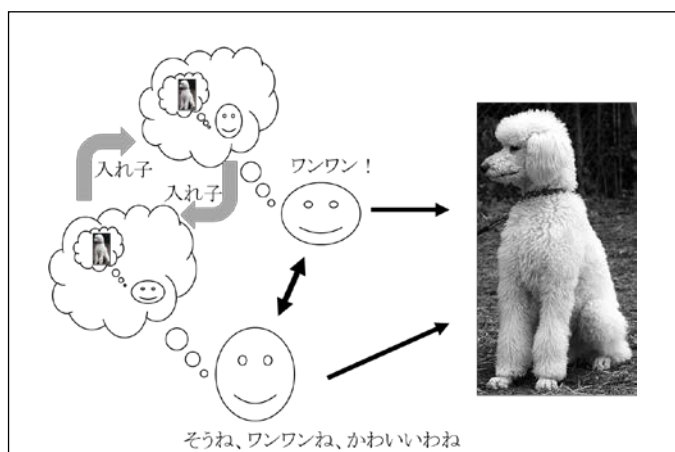
「ワンワン」と言っているときに、子どもの頭の中では、お母さんの頭の中にもワンワンが見えているだろうなと思っている。お母さんは、子どもの頭の中にワンワンが見えているんだなと思っている。

結局、ワンワンを見ると、子どもの頭の中にはワンコの表象、Representation ができるわけです。お母さんを見てみると、お母さんの視線もワンコに行っています。そうすると、お母さんの目はワンコを見ているから、お母さんの頭の中にもワンコの表象、Representation ができます。

それで、子どもはもう一回お母さんのほうを見て、お母さんも子どものほうを見る。視線を交わし合うということをする、お母さんは自分がワンコの表象を持っているだけでなく、子どもの頭の中にもワンコの表象があると思、子どものほうも、自分がワンコの表象を持つだけでなく、お母さんの頭の中にもワンコの表象があると思って、初めて「そうだね。可愛いワンコだね」と、うなずけるわけです。

これは、文章で書くと「あなたがイヌを見ている、ということをお母さんは知っている、ということをお母さんは知っている、ということをお母さんは知っている」と、ここまで行かないと、うなずけないんですね。論理的に書くと、まさにそうなんです。

ただ、子どもはこの論理を知って、言っているわけではないんですよ。だけれど、そんなことはなかなかできないのですが、このレベルの深さの心の共有



三項関係表象の理解：「あなた」と「私」の入れ子

を一瞬にして人間はやっているわけです。

結局は、「あなたの心の中にワンコがいる、ということを私が知っている、ということをお互いに心が入れ子になって、あなたの心の中はこうだよねということが全部、頭に入っているということです。

このレベルのことができていて、しかも、これをするのが楽しいんですね。子どもは、そうやってお母さんの目を見て、ワンコを見て、「ワンワン」と言うと、お母さんが「ワンワン」とうなずいてくれると、それがとても楽しくて、何度も「ワンワン、ワンワン」と言ったりするわけです。親も喜んで、親も何度もうなずくわけです。

いろいろチンパンジーに言語を教える実験などが1900年代からたくさんありましたが、結局チンパンジーには、このレベルの相手の心の共有がないということが分かったわけです。ですので、シグナルとして、信号として、「あっちに行け」とか「あれを下さい」とかいう信号を出すことはできるけれど、「ああ、このお花はピンクね」とか、「あ、キクマルちゃんだ」とかいう言語は、絶対にチンパンジーは発しないわけです。

それで、「私」と「あなた」と「外界」との関係の理解を共有する、意図の理解ということでは、「あなたが見ているということを私が知っている、ということをお互いに知っている、ということをお互いに知っている」という、3次の意図理解、心の共有ということが出来るのは人間だけで、このレベルがあると言語が可能になります。

つまり、こういう能力を持つエージェントが集まれば、言語は絶対に創発するはずだということです。そうすると、心を共有しているのだから、一致協力して共同作業ができるし、教育することもできるようになるのではないかとということです。

心の共有の発達というのは、従来「心の理論」と呼ばれていたところがありまして、この「心の理論」というのが、すごく大ざっぱ、雑ばくなものでした。細かい研究はたくさんあるのですが、「心の理論」と言っただけで何を指しているかということには……中に細かい要素がすごくたくさんあるものを、雑ばくに「心の理論」と言っていたんです。しかし今は、それがいろいろ分解されてきました。

一つは、お母さんとか、保護者、ケアラーの顔、目というのは、本当に小さい赤ちゃんのときから大事なことで、赤ちゃんは、お母さんの顔を常に見る。何かを教えてもらうとき、「こうやるんだよ」と教えてもらうときも、お母さんの手元を見ているのではなくて、お母さんの顔を見ている。つまり、社会的な参照が、もう本当にインネイトにあるんです。

チンパンジーは、「こうやってやるんだよ」とやると、手元を見ている。物体と物体がどういう関係にあるかをじっと見ていて自分でやろうとするのだけれど、人間の赤ちゃんは、手元というよりはお母さんの顔を見て、何をしているのか、何をしながらしているのか、何をしたら喜んでくれるのかというふうに見ています。

そのときに赤ちゃんは、自分のほうを向いてくれる人が喜んでくれると嬉しいわけです。これが、社会的な随伴性があるときにだけ互酬性が出るということです。全然そばを見ている人が笑っても赤ちゃんは嬉しくないのですが、自分をほうを見ながら笑ってくれると、とても嬉しいんですね。ですから、そもそも社会的随伴性と社会的参照があっ

て、それですごく他者の心に向くようにできている。それを理解してはいないのですが、そう向くように、そもそもできています。

それから、もっと情動のレベルでは、情動伝染というものがあります。これは、自分ではない他者の快または不快が伝染することです。よく保育園なんかで、赤ちゃん 1 人が泣きだすと、みんな泣きだしてしまうとかいうことは情動伝染なのですが、情動伝染は哺乳類に一般にあります。ネズミでも情動伝染します。ですから、情動伝染は、進化的、系統的にはかなり深いところからあるのですが、これが人間にもあります。

その次に情動的共感というのがあります。それは、他者の情動、つまり泣いたり笑ったりしていることに対して、自分ではないことは分かっているのだけれど、もうほとんどオートマチックに自分にも同じような感情が湧き上がってくる、喚起されることです。もらい泣きをしてしまうとか、小説を読んでいてポロポロ涙を流すとかいうのは、これです。

自己の認識はあるし、自分と他者は違うというのはもちろん分かっているのだけれど、もうオートマチックに悲しみが伝わってしまったり、喜びも伝わってしまうというのが情動的共感です。

もう一つは、認知的他者理解です。先ほどの、自分の心的世界と他者の心的世界は違うものだということを理解することです。私がちゃんと見ていて何かを考えていても、こちら側にいる人がそれを見ていなかったら、違う心的世界を持っているだろうと分かることです。これが認知的他者理解です。

その認知的他者理解があった後に、認知的共感というのがあります。これは、他者は自己と異なるのだとちゃんと認識した上で、そして、全てのことを客観的に見た上で、やはり他者に感情を同調させることです。東日本大震災とか何かを見て、そのとき情動的に涙を流すのではなくて、「ああ、本当に大変なことだ。あの人たちは毎日どういうふうに住んでいるのだろう」と思って、ボランティアに行くとか。そういうのは認知的共感です。

従来「心の理論」と呼ばれていたものは、主に認知的他者理解のところを中心に考えていて、随分荒っぽいものであったことが、今はよく分かっています。これは、時間がないのであまり詳しくは言えないと思うのですが、本当に小さい赤ちゃんで、6 カ月と 10 カ月です。

赤い真ん丸いもの、全然人間には見えないのですが、目玉があって、顔のようなものがあります。それが一生懸命、坂を登ろうとしても落ちこちて、苦労して苦労して上がろうとしているというような画面を見せた後で、三角形の目があるものが出てきて、三角形がそれをグイグイと押し上げてあげて、両方とも頂上に「はい、着きました」という漫画と、丸いものが上がろう上がろうとしていたら、上から意地悪な四角形が来て、グイグイと押し戻してしまっ、みんな落ちこちてしまったという画面を見せるんですね。

これは、目が二つ付いていることと、一生懸命上がろうとしている動作というバイオロジカルモーションが一緒になって、欲求を持ったエージェントが意思を持って登ろうとしているという示唆をしています。

それで、三角形はそれを後ろから助けてあげるというエージェントであり、四角形は上から邪魔をするエージェントであるという社会的相互作用を示唆する状況を赤ちゃんに見

せます。

6カ月の赤ちゃんと10カ月の赤ちゃんとに見せて、両方とも実験の後で「赤ちゃんはどちらが好きか、どちらを嫌いか」というのをやると、赤ちゃんは圧倒的に優しい三角形が好きなんです。意地悪な四角形は嫌いで、「いらぬ」というわけです。ですから、赤ちゃんは優しい三角形が好きということです。

同じようなのですが、全然社会的作用がないもの、丸いものに目がないので、エージェントであるという気がしないもの、それから、ただレールの上を上がったり下りたりしているような、バイオロジカルモーションではない動きをしているものに対して、三角形が後ろから押し上げたり、四角形が上から押し落としたりしても、どちらも別に、好きでも嫌いでもないんですね。全然ニュートラルなので、赤ちゃんは別にどちらを好むこともないということです。

いろいろな実験があって、結局のところ、優しい三角形と、ただのニュートラルの三角形だったら、優しい三角形が好き。意地悪な四角形とニュートラルな四角形では、ニュートラルな四角形が好きというふうに、やはりすごく社会的参照と、その随伴性によって、自分にとって心地よく感じるものというのは、優しいことなんです。赤ちゃんにとって。そういう本当に情動的な部分で、人間の基本的な良さというのはあるのだと思います。

よく誤信念課題というもので、サリーとアンがいて、サリーがバスケットの中におもちゃを隠して行ってしまっていて、いない間にアンがそのおもちゃを箱の中に移し替えてしまっていて、行ってしまった。そうしたら、戻ってきたサリーは、こちらにおもちゃがあると思っているのでしょうか。それとも、こちらにおもちゃがあると思っているのでしょうかという、これを誤信念課題と言います。

こういう研究をずっと、心の理論研究者はしてきたわけですが、これは情動的なことではなくて、自分の心的状態と他者の心的状態が同じであるか、違うかということが理解できているかということですよね。

サリーはバスケットの中に入れて行ってしまっていて、いない間にアンがおもちゃを入れ替えたので、見ていないサリーは、帰ってきたときには、依然としてバスケットにあると思っているはずだということです。

ですが、このテストを受けている子どもはこれを全部見たので、自分は、バスケットではなくて箱の中に移されていることを知っているわけです。でも、自分が知っているからといって、「いなかったサリーは知っているかな」ということを聞かれて、「うん、知っている」と言うと、間違いですよ。

「分かっていない」「こちらだと思っていない」ということが、自分は箱に移されるのを見たけれど、サリーは知らないということが分かるようになるのがいつかということ、大体、6、7歳はもうほとんど分かるようになっていきます。

言語精神年齢になっていますので、絶対年齢ではないのですが、20カ月というとは3歳、4歳とか、その辺では、まだあまり分かっていません。6、7歳になると急激に分かるようになって、100%分かるようになるというのが普通の子どもたちです。

自閉症の研究で、これがとてもよく使われるのですが、自閉のお子さんたちは、言語精

神年齢で統一しても、最終的には分かるようになるのですが、非常に長い時間がかかって、そこがオートマチックに振り分けができていくわけではないらしいということが分かっています。でも、これは認知的他者の理解の話です。

ここから先は、私の主人の、東京大学の長谷川寿一が今、共感性の進化と神経基盤という新学術領域を始めておられて、私は別の新学術で思春期のことをやっていたのでメンバーではないのですが、結婚して同じところに住んでいるものですから、昨日、借りてきました。

“**Emotional contagion**”という、ネズミでもあるものが情動の伝染です。それと、“**Empathy**”というのが、自己と他者は違うのは分かっていたとしても、もうオートマチックに、相手が悲しそうだと涙が出てくるというものです。“**Sympathy**”というのが、認知的に分かっているのだけれど、「ああ、やっぱり大変ですよね」というように分かることです。その情動伝染とか共感とか同情というレベルを、この新学術では脳基盤、神経基盤と遺伝子のほうに落とそうとしています。

非常に面白い研究結果が、この2、3年ぐらいで出てきています。全部の哺乳類を調べてはいませんが、ネズミの情動伝染というのを調べてみました。

ネズミは情動伝染をします。ネズミは、ケージメイトという、同じケージに入れられている仲間が電気ショックでビリビリ足が痛いというのを見ると、自分はショックを受けていないのだけれど、見ているほうのネズミも、同じように痛みを感じるんですね。それを脳内でやってみると、前部帯状回、**Anterior cingulate cortex (ACC)** というところが賦活しています。

人間がそうなんですね。人間は、自分が痛みを受けているのではなくて、他者が痛みを受けているのを見て、何か「うう、痛い」と感じる時に、やはりACCが賦活しているので、情動伝染というのは、たぶん哺乳類に共通していて、仲間が痛くなっているときは自分も痛いと感じるということがあがるようです。同じACCが基盤であるということです。

「@亀田」というのは、東大の社会人類学の亀田先生が、この新学術の領域で非常に面白い研究をされているのですが、その亀田先生のところからこれを持ってきました。

黒い写真のほうは、自分自身が物理的に針を刺されたりして「痛い」というときと……社会的に怒られたり、怒鳴られたり、おとしめられたり、振られたりとか、自分がそういう社会的な痛みを経験するのと、自分が物理的な痛みを経験するのが、結局、同じ場所だということです。

“**Social pain**”と書いてあるほうが、侮辱されたり、怒られたり、振られたりするときです。それは、**dorsal ACC**、背側前帯状回であるということです。“**Physical pain**”という、注射針を刺されたりするときも、やはりそこなんですね。

そして、もう一つは右側の“**Ventral prefrontal cortex**”で、前頭葉前野の腹側の右側です。自分が経験する社会的痛みと物理的痛みは、やはり脳の同じところで感じられているわけです。

それが、他者が物理的に痛みを受けているのを見ているときにどうなるかと思ったら、これは同じ場所だったんですね。他人が針を刺されているところとかを見て「うっ」と思

うときは、自分が物理的に「痛い」と思っているときに感じているのと同じところ、やはり ACC とか Ventral prefrontal cortex が賦活しています。

ところが、非常に面白いのは、自分のときは社会的な痛みも物理的な痛みも共に、dorsal ACC と右の prefrontal だったのに、他人が社会的痛みを経験しているのを観察するとき、他人が怒られたり怒鳴られたり、社会的に屈辱を受けたりしているところを見たときに賦活する脳の場所は、他者が物理的な痛みを経験しているときの場所ではないんです。

自分のときは同じなんです。自分のときは、社会的痛みと物理的な痛みは同じところで感じていて、他者の物理的な痛みは、その同じところで感じているのだけれど、他者の社会的痛みというのは、Dorsomedial prefrontal cortex とか、Medial prefrontal cortex とか、VMPFC とか、要するに認知的な前頭葉のところで処理しているんです。

ですから、物理的な痛みというのは、結構オートマチックに、同じようにいくのだけれど、他者が社会的におとしめられている、屈辱を受けている、非常に悲しんでいるというようなことに対する自分の感情というのは、前頭葉で処理されています。認知的に処理されているんですね。これは違うのだということが分かりました。

そういう情動的な反応とか、認知的に共感するということの強度、それが強度にそうするかしないかというのは、かなり個人差があります。その共感性の個人差に遺伝的基盤があるかどうかということで、ヒトのそういう優しい感情とか何かはオキシトシンが関係していますから、オキシトシン受容体の多型を調べてみました。

AA という遺伝子型と、AG、GG というのがあって、女性と男性で調べてみたら、オキシトシン受容体の多型が違う遺伝子型を持っていても、女性は、まあ、どれも同じような共感性を感じるのですが、男性には非常にばらつきがあって、特に GG の人たちはすごく高いということが分かっています。共感性に個人差があることには、女性よりも男性のほうが遺伝的な基盤が強く出ているということが分かりました。

これは、不公平感というのがどのように感じられるかという調査を、7つの別の文化でやってみたとのことです。

上は、自分自身が1個しかもらっていないのに相手は4個もらっているという、自分が不公平なときです。このときは、みんな怒ります。しかし、自分が4個もらって相手が1個しかもらっていないという、自分が得をしているとき、どれだけ後ろめたさを感じるかは、文化によって非常に違うという研究です。

「Equal」と書いてあるほうは平等で、どちらも4つずつとかです。“Disadvantageous”という、こちら側のグラフは、自分自身が1個しかもらえない、相手が4個の場合です。下の軸は年齢です。4歳から5歳、6歳で、15歳までで、どれだけ不満を感じるかというものです。

不満を感じる度合いが、大体、非常に高いですね。4歳のときから結構、不満は感じていて、「これは不公平だ。損している」という感じは、年齢とともにどんどん高くなります。ですから、自分が損をしたときの不満感に関する文化差はわずかで、それは小さいときから非常に敏感で、年齢とともに、どんどん不満感が増加するということです。

変なのはメキシコなのですが、何でメキシコ人はあまり増えないのかというのは、ちょ

っと分かりません。

とにかく、自分が損をしたときの「アンフェアだ」というのは、すごく明らかです。ところが、自分が得をしたときの後ろめたさ感というのは、左側の **Equal** に対して、自分が **Advantageous** だったときで、いくつかの文化では、「後ろめたい」というのがあって、年齢とともに、後ろめたさは上昇します。ですが、いくつかの文化では全然ないです。あまり上昇しないです。

例えば、宝くじで 5000 万円当たっても後ろめたさは感じないですかね。感じますかね。目の前で自分が 500 円儲かって、隣の人が 100 円損をしていたら、後ろめたさを感じますかね。感じませんかね。そういう、自分が得をしたときの後ろめたさというものは、やはり相手の社会的不満を感じる事だから、前頭葉で処理するので、結構、認識的だし文化的です。

だけれど、自分が損をしたときの不満感は、これは自分の痛みのことだから、必ずみんな、不満を感じるわけです。

ですから、文化というのは情報処理・意思決定アルゴリズムであり、普通は自然環境がこうだったときに、いろいろ情報を査定して、一番いい行動選択肢を選ぶというように脳はできているので、違う環境だと、別の行動選択が一番良くなるということです。

人間はそういう意味で、この脳というアルゴリズムは、他者を感じ、他者を理解し、他者が何を言っているかとか、他者の心的世界がどうかということを経験しながら、共同幻想かもしれないけれど共有して持っているこの文化環境に、何をしたらいいかということ、行動選択肢を促すように造られているということです。

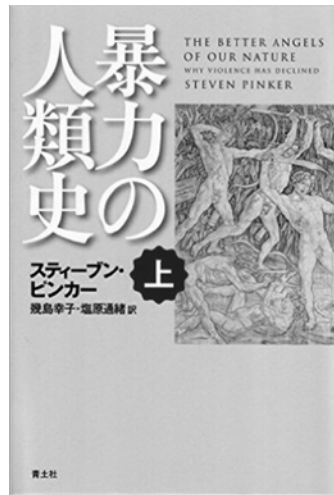
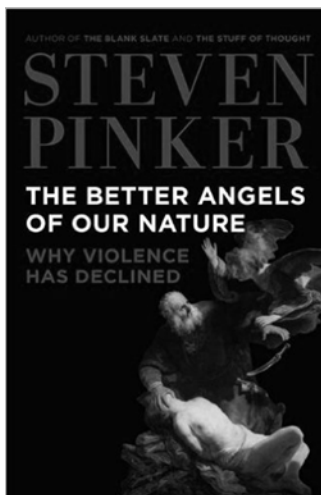
最後にちょっとだけ暴力の話です。

ピンカーという人は、私たちが 1995 年に人間行動進化学会というアメリカの学会に参加するようになってからずっと、毎年のようにお会いしている人です。始めは単に言語学者だったんですよ。ところが、どんどん、どんどん、この人はすごくいろいろな人間の事について考察を深めてきて、最近、この『暴力の人類史』という本を出しました。

これはもう大部の上下 2 巻なので、読んでいただくしかないのですが、要は、社会における暴力

の頻度というのが、先史時代、小規模伝統社会から国民国家の時代へと確実に減少しているということ、ありとあらゆるデータで示しています。私もそうだと思います。

では、なぜなのかということで、ピンカーもいろいろ理由を挙げているのですが、私が



スティーブン・ピンカー 2015 (2011)『暴力の人類史』上・下 幾島幸子、塩原通緒訳 青土社

一つ思うのは、技術がどんどん進歩して、日常生活の苦勞が減って、日常生活で苦しいことがなかなかなくなって、子どもが死ぬこともめったになくなって、技術によって日常生活は確実に快適なものになってきましたので、**Suffering** というものに対する感覚が非常に、徐々に徐々に、「**Suffering** はしたくない。だから、他人に対してもさせたくない」ということの閾値がどんどん上がってきたというのが、一つあると思います。

それから、社会的共感を感じられる相手の範囲というのは、先ほどのように自動的に起こるわけではなくて、他者に社会的共感を感じるところは、結構、前頭葉のところにありますから、社会的共感を感じる他者の範囲というのを拡大させます。自分の国だけとか、自分の村だけとか、男だけとか、白人だけとかではなくて、どんどん拡張していくということが起こってきています。

日常的な技術の発展による生活の快適さが上がって、苦しみというものに対する閾値が上がったことと、社会的共感を感じる他者の範囲を拡大していくということが混ぜ合わされると、社会全体の暴力許容度とでも言われるものが徐々に変化してきて、その次の世代は、その許容度が当たり前になって、そこからまた許容度が上がってということになって、あるところまで行くと、社会環境のフレームシフトのように、相転移のように、ガラッと「暴力は駄目」みたいになっていくのではないかと考えています。

これは私の研究の一部です。日本において 1900 年～2008 年の間に、100 万人当たりの殺人率はここまで減りました。昔は結構、戦前は高いところで推移していますが、本当に急激に下がっています。

100 万人当たりの被殺率、殺人で死ぬ人というのは、最悪の国々が、2002 年だとういう国々で、中南米と旧ソ連邦諸国が非常に高いです。コロンビアなんかは、本当に 100 万人当たり七百何十人が殺されて死ぬわけです。

最良国だとこちらは 700 ですが、こちらは最高でも 19 人です。大体、欧米諸国というのは 10 人前後です。それに対して日本は、アイスランドと共に、最も少ないうちの一つです。

どれだけ暴力的かということは、現在の社会でも、社会によってものすごく違いはあります。ですが、日本の先ほどのグラフに見られるように、長い目で見れば、非常に下がっています。

まとめとして、あとはいろいろな暴力のこととか道徳の起源は山極先生のお話につながりたいのですが、私が今日お話ししたかったのは、ヒトは他者と心を共有できるので、文化環境というものをつくり出して、そこに適応するということです。

ヒトは、他者を自分と同じエージェントとみなして共感する能力があるということです。それはもう物理的に脳の部位として分かります。

しかし、物理的な痛みの共感と社会的な痛みの共感とは脳の活性部位が異なるということです。社会的な痛みの共感には、かなり前頭葉の賦活が重要なので、ここは文化と教育でだいぶ変わっているでしょう。

ヒトは心が共有でき、他者に共感することができるので、「他者をいたわる」道徳を文化的につくり出し、それを社会的環境とすることができる生物的基盤を持っていると思いま

す。

しかし、自己利益の追求と競争というのは非常に重要であるし、それに何も関与しないのでは全部負けっぱなしです。そのためには、他者に何らかの競争を仕掛けなければいけない。その暴力がどう抑制されるかというのは、状況によって非常に複雑であるでしょうということです。

社会的共感を作動するのは前頭葉の認知的なものなので、そこはやはり、どこを抑制して、どこは抑制しないほうがいいのかということが、結構、状況ディペンデントだから、こういう認知的なものになっているのだと思います。

何か中途半端な話をたくさんしたかもしれませんが、ここでおしまいにしたいと思います。山極さんにつなげたいと思います。どうもありがとうございました。

(拍手)

(4) 講演2：山極壽一 氏 「言葉以前のコミュニケーションと道德の起源」

【司会】 続きまして、次の講演者、山極壽一先生のご紹介をしたいと思います。山極先生は京都大学のご出身で理学博士であります。ご専門は人類学、霊長類学でございます。京都大学理学部を卒業後、同大学院を終えられまして、日本モンキーセンター・リサーチフェロー、京都大学霊長類研究所助手を経て、京都大学大学院理学研究科助教授、さらに教授を務められております。

その間、大学院理学研究科科長、理学部長を務められ、現在は京都大学総長という要職に就いておられます。さまざまな学会などで会長なども歴任されておられて、日本霊長類学会会長、国際霊長類学会会長などを歴任し、また日本アフリカ学会理事、さらに、さまざまな審議会や会議での要職も兼ねておられます。

山極先生と申しますと、多くの方はゴリラの研究ということでご存じかと思いますが、ゴリラの行動や生態を基にした初期人類の生活を復元することによって、人類に特有な社会特徴の由来を探っておられます。それでは、山極先生、お願いします。

【山極】 こんにちは。山極でございます。昨日、オバマ大統領が広島を訪問されて、核兵器をこの世から廃絶するという声明を出して、非常に日本が沸き立っています。それに水を差すわけではないのですが、2009年、あのプラハ演説の8カ月後に、オバマさんがノーベル賞の受賞式で演説をしています。

そのときに、こういうことを言っているのです。“War, in one form or another, appeared with the first man.” この“first man”というのは一体何を意味するのでしょうか。

“At the dawn of history, its morality was not questioned” .これは、言うならば、戦争のモラルティーというのは疑うべくもないと、肯定しているわけです。そして、“It was simply a fact, like drought or disease.” これは、戦争というものは自然現象と一緒にということ。そういうことをおっしゃっています。

要約すると、「戦争はどのような形であれ、昔から人類とともにあった。その道犠牲が疑われたことはなかった。平和を維持する上で戦争という手段にも果たす役割がある。戦争

は時には必要であり、道徳的にも正当化できると判断できることがある」ということを、あのノーベル平和賞受賞式のときの演説で語っているわけです。

これを聞いて非常に落胆した方々も多かったと思います。でも、今回、それを根本的に変える姿勢は見られなかったと私は思っています。

それは、どういう理論になっているかということ、狩猟というのが人類進化の大きな動因になってきたということです。人間は元から狩猟者であり、その狩猟によって、さまざまな特性を進化させてきた。そして、それを、特に狩猟に使った武器を転用して戦争を始めた。だから戦争の起源は古いのだということを言っているわけです。

そもそも人類に秩序が生まれたのも、人類社会というものが多層的になったのも、この戦争という手段を平和的に利用したからだと言っているわけです。この元になる考え、本能と文化による戦争の必然性を語る議論が第二次世界大戦直後にありました。これは、よくよく思い返してみたり、あるいは裏を読んでみたりすると、戦勝国の理論ではないかと思えます。

実は第二次世界大戦直後に、その議論を引き起こしたのはレイモンド・ダートという、アウストラロピテクス・アフリカヌス (*Australopithecus africanus*) を1925年に発見した有名な先史人類学者です。彼は戦争中にこの化石人類の頭骨を調べているうちに、いろいろな頭骨に共通の傷跡があることを発見しました。そして、その傷跡は、人類が互いに、キリンの大腿骨を武器として使って殺し合った結果であるということを発表したわけです。

同じころに、やはり人類学者のバーソロミューとバードセルが、先ほど言った話ですが、狩猟というものが人類の進化の動因になったという、狩猟仮説を立てました。

実は、これを見事に体現した映画がありました。『2001年宇宙の旅』です。皆さんも、年を取った方はご覧になったことがあると思います。私も、もう夢中になって見ました。

その冒頭に、当時は疑いもなく「これは本当なんだな」と思ったのですが、「夜明け前」というシーンがありました。人類の祖先が森林からサバンナへと進出を始めたときです。まだ「猿人」と呼ばれる時代です。

サバンナですから、水がありません。まず、猿人が宇宙から来た直方体の物体に靈感を受けて、そばに転がっていたキリンの大腿骨を拾って、ビュンビュンと振ってみるわけです。「あ、これで狩猟がうまくいくかもしれない」と。案の定、その男は狩猟者として成功を収めます。その集団の英雄になるわけです。

そして、しばらく後、水場をめぐる二つの集団が争い合っているときに、またその男が、その骨でできた梶棒を振ってみるわけです。「これは武器になる」ということで、ある集団が他の集団を水場から追い払って、その集団が他の集団を支配するというような、人類社会に秩序が生まれます。

そして、その梶棒、キリンの大腿骨が空中に放り上げられて、暗い宇宙に浮かぶ宇宙船になるわけです。それがまさに原罪であったというような印がそこに刻印されて、それがコンピューター時代になり、そして、まさに宇宙からの裁きに掛けられているというのが、『2001年宇宙の旅』のテーマです。

そこに当たり前のように描かれていて、たぶん多くの大衆は、これを当たり前のことと

見たに違いないわけです。しかも、それを助長するように、同じ時代にロバート・アードレイという劇作家が『アフリカ創世記』を書きました。

他にも何冊も本を書いているのですが、「戦争は最初から人類とともにあった」ということを書いています。戦争は平和の手段として非常に重要であるということを訴えています。それを、とりわけアメリカの政治家は本当だと思い込んでしまったのではないのでしょうかというのが、今日の私の話の始まりです。

その後、この説は完膚なきまでに否定されたんです。しかし、否定されたことを知っている人たちはあまりいません。霊長類学では社会生態モデルというものが提唱されました。300種類ぐらいのいろいろな霊長類が現存しているわけですが、その霊長類の社会をつくる環境要因というものを調べました。

その環境要因の中の大きな二つの要素は、食物の分布と量、そして、狩猟する側ではなくて、狩猟される側として、その狩猟圧を逃れるために、さまざまな隣人、仲間を使ってきたということです。それが社会環境をつくり、群れというものをつくったのだという話になっているんです。

狩猟する側としての意見は一つもありません。チンパンジー、あるいはヒヒは、小動物を狩って食べますが、それは人間の狩猟に比べると非常に頻度も少ないし、それによって社会ができたというような観点は一切語られていないわけです。狩猟される側だったんです。

そして、化石の証拠からしても、人類が本格的に狩猟を始めるのは、わずか40万年～50万年前です。チンパンジーとの共通祖先から人類の祖先が分かれたのが700万年前だとすると、直後に直立して二足で歩くことが始まっていて、脳も200万年ぐらい前から大きくなっているにもかかわらず、本格的な武器を使った狩猟が始まったのは、長く見積もっても50万年前しか証拠が出てきません。そして、人間同士が戦い合った証拠というものも、1万年前を下りません。ですから、武器を使って人間同士が殺し合ったという歴史は、人類の進化史から言うと、大変新しいということになります。

では、何で集団間の暴力が増加したのか。これは、おそらく人口と集団密度が増加し、それに伴って生業様式が変化したということが大きな要因となっています。農耕と牧畜のことを言っています。そして、新しいコミュニケーションによって人間同士の関係を裁く道徳というものが変化したことによるのだらうと思います。ですから、暴力が増加したことは、もともとの人間の本性がそれを駆動したというわけではないと思うんです。

こういうことについて考えた人たちは、過去にもたくさんいます。とりわけ、人間と動物を比較して見る動物学者たちは、自分の血縁個体に尽くす行動は、一般的に人間以外の動物にも広く見られるということを発見しています。しかし、血縁以外の個体に対して、血縁者に対すると同じような、道徳化された、つまり、コストを引き受けてまでも他者を助けるというような道徳、これは人間の世界だと「黄金律」と言われていますが、そういう寛大さというのは、ほとんど見られないということを行っています。

これは、1871年に『人間の由来』を書いたチャールズ・ダーウィンも問題にしていたことですが、人間の良心や道徳性というのは進化の結果、獲得されたものなのかどうか。ダ

ーウィンは、人間だけが恥をかくと赤面する、顔が赤くなる性質を持っていると言っています。そして、おそらく良心というのは、人々から賞賛されることによって、良いことをしよう、人々に認められよう、人々の期待に応えようというような形で人間の社会に定着していったものだと予測しています。

その90年後、タンザニアのゴンベ・ストリームというところでジェーン・グドールさんがチンパンジーの調査を始め、チンパンジーにもさまざまな感情を表現する、表情というものがあるということを見つめました。そして、チンパンジーにも非常に複雑な社会があるということも同時に発見したわけです。

そして、その30年以上後に、イタリアのチーム、リゾラッティたちが、先ほどちらっと長谷川さんが言った「ミラーニューロン」というものを見つめます。これはサルで見つめているんですね。サルは、他のサルのやっている動作を見ると脳の同じ場所が興奮する。つまり、自分は動作をしていないのに、他のサルがしている動作を見て、自分が同じような動作をしているように感じる。そういうミラーニューロンを見つめたわけです。

おそらくここにいらっしゃる皆さんは、人間の知性というのは言葉とともに発達したのではないかと考えていらっしゃると思います。とりわけ、その知性に占める部分は言葉である。そして、それは脳の大きさにきちんと反映されているに違いないと思っらると思います。

ところが、先ほど言った人類の進化の順番を見ると、言葉の発明というのは、おそらく数百万年前、長くさかのぼっても十数万年ぐらい前にしかさかのぼれないだろうというのが、化石、あるいはゲノムを調べている生物人類学者たちの見解です。

でも、脳は200万年前に大きくなり始めているわけです。それまで500万年間は、ゴリラの脳とあまり変わらない、500cc以下の脳で暮らしていました。そして、200万年ぐらい前に脳が大きくなり始めます。

実は現代人の脳の大きさというのは、60万年ぐらい前に、既に達成されています。脳の中身は知りませんよ。脳は化石に残りませんから、大きさしか分かりません。あるいは形しか分かりません。

ですから、脳が大きくなる理由として言葉が果たした役割というのは、ゼロです。そして、現代人が登場するのは20万年前ですから、現代人が登場してから、おそらく今のような言葉というのが獲得されたのだらうと思います。つまり、言葉というのは、脳が大きくなった結果であって、脳が大きくなった原因ではないということです。

人間以外の霊長類で脳が大きくなった原因は何かということ調べて方がいます。これはロビン・ダンバーというイギリスの人類学者で、脳が大きくなるということに対応して、先ほど長谷川さんが言った、脳の新皮質の部分、大脳部分が大きくなっているということに気が付きました。

ですから、いろんな霊長類学者がこの新皮質の脳に対する割合というものをX軸に取って、Y軸に何らかのパラメータを取って相関関係を調べてみれば、脳が大きくなった理由が分かるだらうということで調べてみた。道具を使うか使わないかとか、あるいは、食物についても、果実か、果実以外の葉っぱであるか虫かとか、いろいろなパラメータをY軸に

並べてみたんです。でも、なかなか相関関係はきれいに生まれませんでした。

たった一つ、非常にきれいな相関が得られたのは平均的な群れの規模です。霊長類のそれぞれの種の平均的な群れの規模を取って、それを新皮質比と対応させてみると、脳に占める新皮質の割合が大きければ大きいほど、群れの規模が大きいことが分かりました。逆に言うと、群れの規模が大きければ大きいほど、新皮質が占める割合が高いことが分かりました。

これは何を意味しているかという、付き合う群れの仲間が増えると、それだけ脳を使う、脳容量を増やさなくてはならなくなったということを表しているのだろうということです。

中身まで分かりませんから、一体それはどういうことなのかということには分かりませんが、少なくとも、それぞれの仲間に対して、違う社会的な対応をしなければならないとすれば、これはニホンザルでもそれぞれの仲間を個体識別して付き合っていますから当然のことなのですが、社会的複雑さに応じて脳は大きくならざるを得なかったのだろうということです。つまり、食物を探したり道具を使ったりという知性ではなくて、社会的知性として、霊長類の脳も人間の脳も大きくなったのではないかということが類推されたわけです。

さらにダンバーは、この相関係数を用いて化石人類の脳の大きさから、その人類の平均的な集団規模を割り出しました。アウストラロピテクス、300万年ぐらい前に暮らしていた脳の小さな、ゴリラ並みの脳を持った人類の祖先の時代から、脳がだんだん大きくなって現代人まで、脳の大きさと、平均的にどのぐらいの集団で暮らしていたのかということを経算したのです。

そうすると、脳がまだ小さい猿人のころは10人～30人ぐらい、脳が最初に大きくなり始めたホモ・ハビリスは610cc～650ccの脳容量を持っているのですが、50人ぐらいです。そして、だんだんと1,000ccを超え始めると70人、100人となって、現代人は、1,500ccぐらいの脳だと160人ぐらいの集団で暮らすのが、相関式から割り出された平均の数だということが分かってきました。これをダンバーは、言葉を話す前の現代人の祖先が作り出した社会だろうと類推したわけです。

最近、クリストファー・ボームという、文化人類学者でありながらチンパンジーの社会的な調査にも入った研究者が、『モラルの起源』という著書の中で、先ほどの、ダーウィンが悩んだ「恥」ということについて統計的な資料を出しています。

「恥」に当たる言葉は、どの民族にも見られるそうです。赤面するのは人間にしか見られなくて、チンパンジーにもゴリラにも見られません。私もゴリラで調査していますが、ゴリラが赤面するという現象に出会ったことは一度もありません。

一方、「罪」に近い言葉というのは、多くの民族に見つからないということを行っています。つまり、「恥」は人類に共通な古い現象だけれど、「罪」は人類がそれぞれの民族や文化圏に分かれてから出てきたものだというわけです。

共感と同情。これは先ほど長谷川さんも言っていましたが、共感というのは、他者の気持ち分かるということです。でも、他者の気持ちが分かったからといって、他者に思い

を寄せる、同情するかどうかは分からないわけです。逆にそれを利用して、他者を陥れてしまうということだってできます。

おそらく、同情というのは人間に特有の感情ではないかと思います。そして、恥と罪の意識を考えるためには、良心を持つに至った過程というのを、どこからか引っ張り出してこなければいけません。良心をどのように定義するかというと、「ルールを内面化し、コミュニティの価値感に共鳴する能力」ということです。

われわれ人間以外の霊長類を扱っていますと、動物社会にルールはあるのかどうか、それが内面化されているかどうかということが非常に気になります。人間以外の霊長類を見ても、やはり人間社会のルールであっても、もともとの源をたどれば、おそらく所有と共有という話にあるのだらうと思います。何かを所有する。それが物なのか、あるいは仲間なのか。それをめぐって競合というものが生じ、その競合を解消するためにルールができるということです。

そこで、すごく面白い現象に気が付くんです。それは、人間以外の霊長類では、食物というのは公開するものではないということです。むしろ、個体本位で消費するものです。他者と分け合うものではないということです。ところが、人間はどの民族のところに行っても、食物を分け合うことに対して非常に寛容です。

そして、もう一つ。性は逆に人間社会では隠すものですが、動物社会では公開するものです。逆転しているんですね。どうも人間以外の霊長類の社会のルールと人間社会のルールとが、どこかでドラスティックに変わってしまったことを反映しているのではないかと私は思っています。

分配というのは、ほとんどの霊長類の種では見られません。ただし、人間に近い類人猿では、時折見られることがあります。有名なのはチンパンジーで、特に肉を食べるときには仲間によく分配します。

ただし、これにはルールがあって、肉を持っている個体から、持っていない個体に常に気前よく分配されるのではなくて、持っていない個体が持っている個体のところに行って「ちょうだい」をしないと、分配されないということです。

最近、私もゴリラの食物分配を観察しました。ゴリラにもあるんですね。大きなゴリラの雄がフットボールぐらいの果実を持っているとき、その周りに子どもや雌たちがやってきて、「ちょうだい」をします。そして、雄が果実のかけらを落としてやります。

ただし、これは、渋々ながらです。チンパンジーと同じように、要求されなければ決して分配しません。ですが、食物を分配する種を系統樹の上に並べてみると、非常に面白いことが分かりました。

大人同士で食物が分配される種は、必ず大人から子どもへ、あるいは親から子どもへ食物が分配されます。つまり、大人の食物分配というのは、おそらく大人から子どもに分配する種の中で、それが大人の間にも普及する形で現れてきたのだらうということが推測されるわけです。

そして、分配行動は類人猿とマーモセット科に多く見られます。マーモセット科は南米に生息する樹上性の小さなサルで、二つ子、三つ子を産む多産の特徴を持っています。類

人猿は幼児期が長いです。つまり、子育てに非常に手間が掛かるような種に、大人から子どもへの食物分配が見られ、それが大人同士の間にも普及しているということが類推できるわけです。

さらに、食物分配行動というのは、もともとは植物食の霊長類には必要ななかったけれども、多産とか、幼児期が長くなるというように、子どもに食物を分配する必要性が生じてきて、それが獲得され、大人同士の間で分配行動が起こるようになって、目的が変わったということが推測されています。

その中でI種のみ、それはホモ・サピエンス、われわれ現代人を指すわけですが、血縁でもないのに広く、食物をけちらずに分配するような種が現れたということです。人類というのは、本当に気前がいいんですよ。それはおそらく、他の霊長類種が生息していない危険なニッチに人類が進出したことによるのだろうと類推しているわけです。

これは、食物を道具化している、社会化しているということです。食物を使って人間関係をつくるということです。

人間以外の霊長類では、食物の分配は個体関係の表れでした。血縁や親しい仲間だから分配する。人間は逆に、食物を使って人間関係をつくったわけです。そのためには、食物を持ち運ばなければいけなかった。チンパンジーもゴリラも、食物を持ち運んで分配することは、めったにありません。人間だけが食物を持ち運んで、食物の分布を変えて、それを相手との関係改善、関係構築に利用するわけです。

そのことによって、実は食物を採る時点から、それを分け与える仲間の食欲を考えるようになった。先ほど長谷川さんの発表の中で出てきた「共感」というものが、ここで質を変えていったプロセスを頭に浮かべることができると思います。

ヒト科の類人猿の中で、オランウータン、ゴリラ、チンパンジーと、ヒトを比べますと、熱帯林を出たのは人間だけです。いまだに類人猿は熱帯林の中で暮らしています。それは、熱帯林というのは食物が豊富で安全な場所だからです。熱帯林を一步出たら、食物は分散しているし、乾期になると食物が不足します。

そして、もう一つ、非常に重要なことは、熱帯林の外では地上性の大型肉食動物がうようよしているということです。これから逃れるために、類人猿はみんな、夜は木の上にベッドをつくって寝ます。

しかし、サバンナや草原には高い木が少ない。ですから、おそらく肉食獣に襲われたときに、その大変な事態をどう乗り越えたかということが、実は人間の子どもの特徴と、人間の子育ての特徴に反映されています。

最近、チンパンジーやゴリラ、オランウータンの一生、つまり、一生を通じての、幼年期や繁殖に関わる期間やらが分かってきて初めて、人間と比べることができるようになりました。

私が調査してきたゴリラと人間を比べると、人間の子どもは、とても不思議な成長を遂げます。

まず、ゴリラというのは、生まれるときの平均体重が1.8キログラムしかありません。雄は、大人になると200キログラムを超えます。ですので、赤ちゃんは非常に小さいです。3

年間、お乳を吸って育ちます。

ゴリラのお母さんは、1年間、赤ちゃんを離しません。だから、赤ちゃんは泣きません。非常におとなしいです。こういったゴリラから見ると、人間の子どもというのは、実に不思議な特徴を持っているんですね。

まず、3キログラムもあります。赤ちゃんはよく泣きます。よく笑います。でも、体重が重く生まれてくるということは、成長して生まれてくるのだと普通は思いますよね。ところが、お母さんにつかまれないほど、ひ弱だし、成長も遅いです。

しかも成長が遅いにもかかわらず、乳離れが早いです。1歳か2歳で、お乳を吸うのをやめてしまいます。人間の赤ちゃんの離乳が早いことは、オランウータン、ゴリラ、チンパンジーといった、ヒト科の類人猿と人間を比べると非常によく分かります。

類人猿にも人間にも乳児期、少年期、成年期、老年期があります。乳児期というのは、お乳を吸っている時期です。オランウータンは、何と7年です。ゴリラは3年~4年、チンパンジーは5年もお乳を吸っています。ところが人間は、1年、2年でお乳を吸うのをやめてしまいます。

でも、オランウータン、ゴリラ、チンパンジーは、お乳を吸い終わったときに永久歯が生えているのに比べて、人間の赤ちゃんは、お乳を吸い終わっても乳歯のままです。永久歯は6歳からしか生えてきません。ということは、本来ならば6歳までお乳を吸っていていいんです。ところが、なぜか、早いうちにお乳を吸うのをやめてしまっているわけです。それは、なぜなのでしょう。

そして、繁殖能力が付いても、繁殖をしない時期、あるいは繁殖ができない、青年期と呼ばれる時期があります。そして、老年期が長いです。この三つが、人間の生活史の不思議な特徴なのです。

なぜ人間の赤ちゃんが重たい体重で生まれてくるのか。それは体脂肪率が高いせいなんですね。体脂肪率が、類人猿の5倍ぐらいあります。それは、人間の脳が、生後1年以内に2倍になって、非常に急速度に成長するからです。

1年で2倍、5年で大人の脳の90%、それでも成長をやめずに、12歳~16歳ぐらいで人間の脳は完成します。そのために大きなエネルギーを食わなければいけないし、エネルギーの供給が滞ると大変なことになるから、バッファーとして厚い脂肪を蓄えて、人間の子どもは生まれてくるわけです。

ゴリラと人間の、新生児と成人の脳の大きさを比較してみると、ゴリラの新生児の脳は4年で2倍になって、大人の脳の大きさに達します。人間の新生児の脳は、先ほど言ったように生後1年で2倍に達して、12~16歳まで成長を続けて、やっと成人の大きさになるわけです。ゴリラの脳の3倍になります。

そのために、実は脳に過大なエネルギーを回さなければいけないので、人間の子どもは身体の成長を遅らせます。本来であれば身体に回すべきエネルギーを脳に回しているわけです。そのために、思春期スパートという現象が起こります。

生まれたときの成長速度は速いんだけど、脳にどんどんエネルギーを取られるから、身体の成長へ回すエネルギーが少なくなって、成長速度はどんどん低下します。そして、

脳の成長速度が緩やかになると、身体にもエネルギーが回せるようになって、12～16歳で脳の成長がストップすると、今度は身体にエネルギーが急に投入されて、思春期スパートが起こります。

この思春期スパートの直後というのは、実は心身の成長がバランスを崩して、おかしなことになりやすいです。日本の厚生労働省の調べた年齢別死亡率を見てみると、生まれた直後は死亡率が高いんですね。しかし、親の目が行き届くからどんどん死亡率は下がります。そして、親の目が行き届かなくなると、今度は死亡率が上がり始めるのですが、思春期を終えた直後ぐらいに死亡率がまたトンと上がります。

これは、思春期というのが非常に難しい時期であるということを表しています。精神的に病んだり、あるいは、大人との間のトラブルに巻き込まれたりということが起こるといことです。

日本において、このピークがこの時期にあることは、時代を通じて一緒だという統計が出ています。つまり、これは時代的な問題ではなくて、人間の持っている生物学的な特徴を反映しているということを表しています。

人間の赤ちゃんは、実はゴリラの赤ちゃんに比べて、非常に面白い特徴を持っています。それは、先ほど言ったように、よく泣くんです。よく笑います。それは、人間のお母さんがすぐ赤ちゃんを手から離してしまうからです。他の人の手に渡してしまったり、どこかに置いてしまったりします。重たいですから。しかも、赤ちゃんは、ひ弱ですから、ずっとつかまっていられません。ずっと抱いてられません。だから離してしまうわけです。

そのために赤ちゃんは、自分の不具合を自分で訴えなくてははいけません。だから泣くわけです。ゴリラの赤ちゃんもチンパンジーの赤ちゃんも全然泣きません。それは、お母さんの腕の中にいるから、泣く必要はないわけです。つまり、人間の赤ちゃんは共同保育をされるように生まれついてくるということなんです。

離れて育児をすることによって、実は赤ちゃんに対する共感、あるいは、同じ赤ちゃんに対してという大人同士の共感、同調というものが得られ、それが音楽的なコミュニケーションとして発達していったのではないかと思います。

これは、いろいろな仮説があって、今日は詳しいことをお話しできませんが、言語以前のコミュニケーションであることを、まず覚えておいてください。言葉をしゃべる前に、こういう共同の子育てをしながら同調や共感意識を高めて、人間のコミュニケーションはついに言語まで至ったのだということです。

では、言語以前にどんなコミュニケーションがあったのかというと、それはゴリラからヒントを得ることができます。

ゴリラの挨拶というのは、ニホンザルとは全然違うんですね。相手をずっと注視するというのはニホンザルでは優位なサル、強いサルの特権ですから、弱いサルは見つめられれば視線をそらさなければいけません。そうしないと、挑戦したと思われて、攻撃されてしまうわけです。でも、ゴリラの場合には、顔と顔を合わせる挨拶がすごく多いわけです。

何でこれに気が付いたかということ、私も同じことをされたからなんです。「のぞき込み行動」と名付けました。

のぞき込み行動は、いろいろな文脈で現れます。背中白い、200キログラムぐらいある大きな雄同士が、フーフー言いながら対立しているとき、スルスルッと真ん中に、2頭よりも小さな若い雄が入ってきて仲裁することがあります。そのときに、のぞき込み行動をするんですね。

そうすると、なぜか両方とも仲裁を受け入れて鎮まってしまうんですね。ゴリラには優劣をつけてトラブルを解消するというルールがなく、仲裁者が入って双方が面子を持って引き分けるという行動が発達したのだらうと思います。後で、のぞき込み行動はチンパンジーもやっていることに気が付きました。ニホンザルとはっきり違うやり方で、むしろゴリラに似た形でのぞき込みをするわけです。



ゴリラに独特な対面交渉

あいさつ

では、人間はどうかのと思ったときに、非常に面白いことに気が付きました。人間も対面するんです。ただし、ゴリラやチンパンジーほど近付かないですよ。なぜ近付かないのか不思議に思いました。

人間は机を挟んだ距離というのが、一番落ち着くんですね。顔を向かい合わせます。しかも、長い時間、向かい合っています。

なぜ向かい合うのかというと、会話をしている、あるいは食事をしているのだという理由が成り立つのですが、「ほんまかいな」と。「逆なんじゃないの？」と天邪鬼に考えてみました。つまり、この対面という時間を長引かせるために、わざわざ食事をしている、あるいは会話をしていると言えないだろうか。

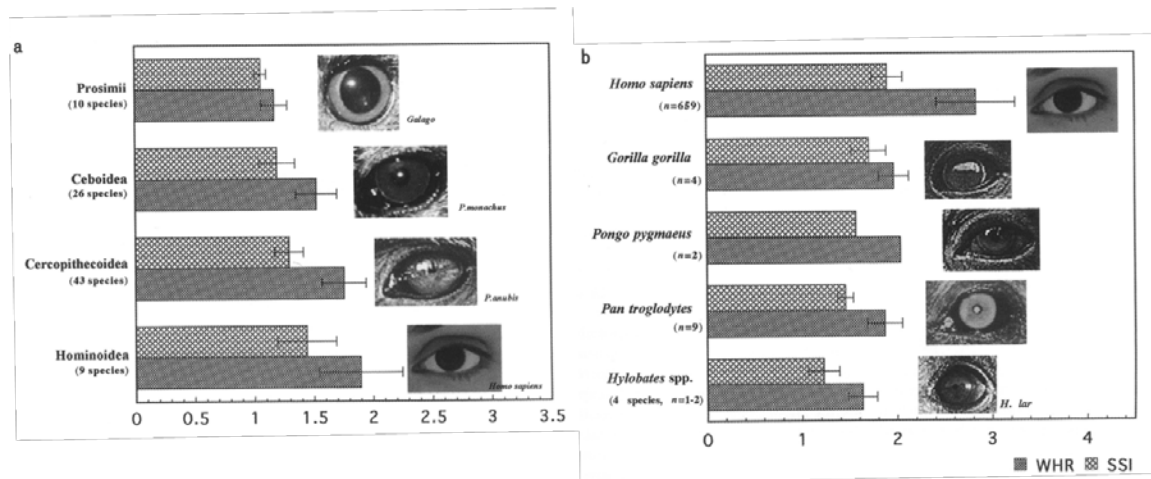
そう考えると、面白いことが分かってくるんです。会話というのは音声というものを使って情報交換をしていると単純に考えたら、何も向かい合う必要はないわけですよ。食事だって、個人の栄養補給だと考えれば、別に向かい合う必要はありません。横を向いていてもいいし、背中合わせにいてもいいわけでしょう？

ところが、なぜか向かい合うのが当たり前のようになっています。どの文化でもなっているというのは、何かここに意味があるに違いないということです。

この疑問にヒントを与えてくれたのが、小林さんと幸島さんの論文¹です。

¹ Hiromi Kobayashi & Shiro Kohshima 2001 “Unique morphology of the human eye and its adaptive meaning: comparative studies on external morphology of the primate eye”, *Journal of Human Evolution* (2001) 40: 419-435.

目というのは、実は人間だけ違うという話です。人間の目だけが、横長で白目があるということなんです。この白目というのがあるがゆえに、人間は目の微細な動きを察知できます。しかも、これまで詳しい研究がないので、はっきり分からないのですが、相手の目の動きからどういう気持ちを察するのかというのは、学習が必要ありません。これは、たぶん生まれつき持っている能力なんですね。だから、おそらく起源が古いです。



Kobayashi & Koshima (2001)

化石に残りませんから、人間のこのような白目がいつごろ登場したのか分かりません。ただし、対面という行動が類人猿とは違う、情報交換の場になっていった。だから、距離を置いて対面し、時間をかけて何かをする必要が出てきたということが、人類の進化史のどこかにあるのではないかと思います。

そして、実は目というのは、自分の相手に対する気持ち、あるいは、自分が感じているうろたえとかうしろめたさとか、そういったものをよく表すわけです。ですから、恥とか道徳とかいうようなことに密接に結び付く表情であった可能性があります。

言語以前のコミュニケーションの進化のプロセスを、雑ぱくに私なりにまとめてみました。

人間の祖先も、類人猿と同じように熱帯林で生まれ、熱帯林で進化をし、後に、700万年～500万年ぐらい前にかけて、だんだんと草原へと進出をしてきたと思います。

草原は肉食獣がうようよしているから、集団を大きくする必要がありました。だから集団を拡大し、しかし、集団を拡大すると分散した食物を得られないので、小集団に分かれて食物を探す必要があった。ここがミソです。集合と分裂という二つの社会性をここで獲得する必要があったということです。

そして、コミュニケーションという話で言えば、類人猿と同じような対面交渉で出発して、食物の運搬や分配、子育てによって培われた音楽的なコミュニケーションを通じて、おそらく共感能力を高めた。それが、先ほど長谷川さんがいろいろ細かく説明してくれた、心の理論という話になってきます。

社会関係で言えば、ゴリラやチンパンジーのような、対等性や平等性というものに非常に神経質になるような社会性から出発して、同調を強化し、そして、いつか意図的な協同

性を獲得するようになり、それがどうしても言語というものの登場に向かわざるを得なくなったのではないかというのが私の結論です。

人間の家族というのは、実は二重性を持っています。つまり、大きな集団であると同時に、小さな家族という集団を持っています。下位単位として家族を持ち、個人が集団間に行き来します。そして、結婚、つまり個体の移動によってできた新たな繁殖集団が元の繁殖集団同士を結び付けるといふ、人間以外の霊長類ではあり得ないことが起こるようになった。

家族というものと、複数の家族が集まる共同体はそもそも編成原理が違います。共同体の中での家族同士は、互酬的な関係で結ばれています。家族の中では、むしろ相手のために犠牲を払っても何かしたいというような向社会的な感情の極地のようなきずなで結ばれています。そして、面白いことに、人間はこの共同体に半永続的に帰属意識を持つ。

人間以外の霊長類は、自分の群れを離れると、その群れとの関係は一切、断ってしまいます。そして、前にいた群れの社会的地位とか個体同士の関係というのは、他の群れに行ったら、完全に消えてしまいます。引き継がれません。なぜならば、彼らの社会ルールというのは、その場でしか存在しないからです。これは、持ち運びできるものではないんです。

人間は、なぜかその社会関係を持ち続けるわけです。これは人間の社会の特徴です。これは、高い共感力を持ち、その共感力を発揮しなくてはならない状況に立ち入ったときに初めて登場した特徴なのではないかと思います。

家族と集団というのは両立できません。そもそも、その編成論理が違っていているからです。例えばチンパンジーは家族を持っていません。共同体だけです。ゴリラは、家族的な集団しか持っていません。共同体的なものは持っていません。それは、二つの違う編成原理を一緒にできなかったからだだと思います。それを両立させたのは人間だけだと思います。

サルの群れというのは、基本的には自己の利益を最大化するためにできています。その自己の利益というのは何かというと、食物を効率良く安全に食べるということです。

ところが、人間の家族というのは、先ほど言ったように、コストを払ってもその集団を存立させたい、集団の利益のために自分を投げ出したいと思う心によって成り立っています。ちょっと大げさかもしれませんが、これは人間以外の霊長類が持たない特徴です。

そもそも家族というのは、複数の男女が混在する集団で性の平等性を保証したわけです。ゴリラだったら、家族同士が離れて独立していないと、雄や雌の性の平等性を保証できなかったのに、人間はそれが集まっても保証できるような社会にしたということです。それは、本来、所有も譲渡もできないもの、これは異性のパートナーということですが、その帰属についての社会的了解を得る必要があったということを示唆しているのではないかと思います。

その所有、あるいは帰属と言ってもいいのですが、それを保証する集団ができたのが人間の集団であり、それはまさにアイデンティティを強化することにつながったのではないかと思います。

人間は、所有を通して互酬性というものを確立していきました。つまり、固定した社会

関係を利用して所有をめぐるトラブルを防いでいたルールを逆転させて、所有を通じて社会関係を操作するようになった。所有を明らかにするためには、優劣とか、群れを離れるとかいうことが、それを保証する役割だったのに、むしろ所有というものを人々の関係を強化する手段として使ったということです。その一つの典型例が結婚です。

おそらく規範というのは、もともと動物の社会性の中にあります。これはチンパンジーでもあると思うのですが、物の所属をめぐる不公平感というのは、先ほど長谷川さんの発表の中でありましたね。これを是正したいという心の動きから、規範というものはできると思います。

しかし、その規範に背く他者をとがめて、その行動を修正したいという気持ちが起きないと、安定した規範にはなりません。おそらくその出発点というのは、先ほど家族のところで言ったように、個人が所有できないものを他者と共有することによって生まれます。つまり、私の妻であって、あなたの妹であるというような関係です。そういうものを共有するような規範。そして、それが所属意識につながるようなものだと思います。

おそらく、不公平感に基づく他者による行動修正は言葉がなくてもできます。しかし、個人が所有できないものを、他者と共有することによって、集団への所属意識を強化するようなことは、おそらく言葉がなければできません。これを規範として徹底していったのは、おそらく言葉であり、人々の間で交わされる噂話や評判であっただろうと思います。

このときに、恥という感情があるかないかによって大きな違いが生じます。おそらく道徳というのは、恥の観念の上に立って、それを言葉が噂話として一般化することによってできたのだと思います。

ただし、道徳というのは、ボームが言ったように、非常に危ういルールです。おそらく道徳性というのは、共同体と家族の重層構造を保つために生まれたのだらうと私は思っております。

この道徳性は集団内にとどまって、なかなか外へ波及していきません。先ほど長谷川さんが、教育によってそれが強化されていく可能性を指摘されましたが、現代は、その可能性と希望があります。しかし、私が言いたいのは、人間の生業様式がドラスティックに変わった時代、そこから延長してきた産業革命ぐらいまでの人間の社会では、なかなか道徳性を集団の外に普遍化することができませんでした。

まずいことに、共感力を高めて社会が結束すればするほど、実は集団間の争いというのは激しくなります。つまり、外の集団を利用して自分の集団の中を固めるということが当たり前になっていくからです。その矛盾をどう解決するかということが、これから問われていくのではないかと思います。

おそらく、集団間の暴力につながる進化の流れというのは、そもそも家族という、共同育児をするような社会組織を持ったことに始まります。食の共同や共同育児というものを危険なニッチで行うことによって、コミュニティというものが成立します。

しかし、それが危険なニッチで細々と生きる上では役立っていたのに、食糧生産が始まって定住生活が可能になり、余剰ができ、食糧生産に携わらなくてもいい職能集団、とりわけ武装集団ができ、そして言語ができて、目に見えないことを共有するような社会が成

立すると、そこで暴力あるいは敵対意識というものが拡大していくのではないだろうかと思えます。ですから、この最後の段階というのは、人類の歴史にとって、進化の歴史にとって、非常に新しいものであるというのが私の考えです。

集団間の暴力を激化させた要因というのは人間の持つ本性にあるわけではなくて、実は、他の霊長類にはない共同体への強い帰属心というものを持った後に出てきた、変な特徴なのだろうと思えます。

その原因は、おそらく定住生活による境界が出現したこと、そして、その集団を大きく見せるために死者を取り入れて、歴史的な係累というものをつくって現実の集団を強くしたことです。言葉ができる前は歌によって、その集団の共同意識を増幅させるようなことが起こった。そして最後に、やはり言葉によるコミュニケーションによって、目に見えない敵というものをつくったということだと思います。

かなり大胆なこともしゃべったので、これから内堀さんに相当怒られるだろうと思っています。どうもありがとうございました。

(拍手)

(5) 講演3：内堀基光 氏 「文化人類学からの応答」

【司会】 後半を開始したいと思えます。それでは、長谷川先生と山極先生のご講演に対して、文化人類学サイドからの応答をしていただきますのは、放送大学の内堀基光先生です。

内堀先生は、オーストラリア国立大学から Ph.D. を取得されており、その後、一橋大学、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所を経て、現在は放送大学の教授でいらっしゃいます。一橋大学の名誉教授も授与されています。

ご専門は、社会文化人類学、民族学。研究分野は、人類の文化・社会の進化的基盤、そして、東南アジア島嶼部の民族誌です。それでは、内堀先生、お願いします。

【内堀】 こんにちは。今日お話しするのは、基本的には、お二人の隣接諸科学でのご発表に対する文化人類学者からの応答ということですが。

知っている人は知っているでしょうが、私は文化人類学の鬼子でして、ちっとも文化人類学者らしくないんです。せいぜい、良くて民族学者で、あまり現在の文化人類学というものには詳しくありませんので、そういうことはあまりうるさく言わないでください。素人的に見ての、文化人類学からの応答ということでお願いいたします。それでは、始めます。

前置きです。文化人類学と隣接諸科学と言うのですが、実は長い間、後藤先生に最初に紹介していただいたように、人類学一般と文化人類学、それから民族学というのは手を携えてきたわけです。今回、「文化人類学研究大会第50回」と言っていますが、「日本人類学会」のホームページをご覧になれば、人類学会・民族学会の連合大会50回という歴史が載っています。不思議ですが、文化人類学のほうには、その歴史が載っていません。

そして、その中で、名前は変わっているはずなのですが、最終的には「日本人類学会・

日本民族学会連合大会 50 回」というのが 1996 年に終わっています。終わったことを受けて、1997 年からは「人類科学連合」、その内実は人類学と民族学の合同シンポジウムというのが 2004 年まで行われております。ちなみに、2004 年の司会をしたのは私で、道具を使うことについての、人類学と、霊長類学の方も入っていますが、文化人類学の合同シンポジウムでした。

そして、実はその「人類科学連合」の第 1 回目のシンポジウムとして、「種としての人類とその未来」というのを民博で開いています。先ほど長谷川さんは触れませんでした、長谷川さんと山極さんはパネリストとして参加されています。司会者は栗本英世さんです。

その後、人類学関連学会協議会合同シンポジウムというのが 2006 年～2015 年まで開かれております。

ですから、一貫して何らかの形で、文化人類学、民族学と、人類学、主として自然系の人類学、あるいは生物人類学——および場合によっては霊長類学——とは、手を携えてきたわけです。少なくとも、ある一定年齢以上の会員は、そのことをよく知っているはずで、その一定年齢というのは何歳ぐらいなのか私はよく分かりませんが、おそらく 50 歳ぐらいかなとは思いますが、間違いがあれば、お許してください。

人類学全体としては、このように一貫して手を携えてきたのですが、実はわれわれの隣接諸科学というのは、そうした、どちらかという生物学的と呼ばれる諸科学の他にもある。おそらく若い——若くなくてもいいですかね——会員の方は、別のほうが隣接諸科学として近いと思われると思います。それは、例えば民俗学であり、社会学であり、言語学であり、歴史学であり、場合によってはカルチュラル・スタディーズであろうかと思いません。

われわれ文化人類学の領域というのは、「人類学として」というのと「社会と文化の研究として」というのと、研究者の嗜好といいますか、趣味といいますか、好みとしては大ざっぱに、この二つに分かれてくるかと思えます。ですが、今日は主として前半部分に関わってくるお話です。

私は、先ほど言いましたように、他の文化人類学の方とわりと違ってまして、人類社会の諸特性に関わる起源であるとか、原初であるとか、初発であるとか、生成について、大変興味を持っております。現今では、そういうことに興味を持っていると言っても、文化人類学の中ですら、決して変な顔はされません。少数派ではあっても、おかしいことをやるというふうには思われなと思います、私がまだ若いころ、というのは 1982 年だったと思いますが、日本で開かれた、ある国際シンポジウムで外国の方といろいろ話していて、「お前は一体何に興味を持っているんだ」と言われて、「一番興味を持っているのは進化だよ」と言ったら、もう唾然としていました。

ほとんどマルクス主義者が出てくる国際シンポだったのですが、あのときは非常に馬鹿にされたというか、目をむかれたというか、あのときの反応は実に面白かったわけです。だけれども、実はマルクス主義と進化主義というのは、いい意味よりも悪い意味で、非常に近い、親近性を持っている思考方法です。ですので、彼らがびっくりするほうがおかしなくて、こちらが本当にびっくりしてしまうようなことです。

今日のお話はわりときちんとした、専門の方によるお話ですので、ちょっとマルクスのことは置いておきます。(笑)

長谷川先生は進化生物学のほうから、もう2行にまとめてしまうと、最終的には人間というところに中心を置いた場合には、焦点を当てた場合には、「蓄積的な文化」と「言語というコミュニケーション手段」の獲得が大きいというように言われたと思います。

そして、人間、あるいは霊長類全体、あるいは哺乳類にも関わってくると思いますが、進化というのは、自己と他者の利益と損失をいかに調整していくかという問題なのだと述べられていたと思います。

山極さんの霊長類学的な視点のほうも、2行にまとめてしまいますと、「人間社会の家族と共同体の重層的な構造」の問題、そこから「共感」であるとか、「仲間との関係を続けること」「人間の信頼関係」というものを強調されていたと思います。

どちらの先生も、これを基礎に、現場、霊長類生態学的な知見、そして、進化心理学的、進化生物学的な視点によるいくつかの実験結果を非常に手際良く紹介されて、私ども文化人類学者としては、「はあ」と思わざるを得ません。

が、内堀としては応答しなければいけないので、ここでの言葉は「それはそうだが？」ということです。「それはそうだ！」に強調を置くか、あるいは何を置くかが微妙になってくると思います。おそらく皆さんもそうだと思います。

実は、進化的な由来ですが、由来を探ることの問題点というのは、文化人類学の中でも、あるいは人類学一般でも古くから論じられてきたことであって、これは霊長類学でも進化心理学でも、同じように言われてきたと思います。

基本的な問題点というのは……われわれが見ているのは、いかなる学問でも、基本的には現在です。古生物学は別ですが、基本的には現在ですので、現在の事象から起源・初発を探ることの有効性、つまり方法論、基本的には比較になるのか、あるいは比較以前の論理になるのかということです。

そうして推論され構築された起源から現在を説明することにどのような意義があるのか。そして、全体としては、現在から構築された過去へ、さらに、そこから現在へという循環論法の論理としての説得力と説明力がどれだけあるのかということに尽きると思います。

これはかなり好みの問題で、こうした、やや循環的な論法に納得される方もいるし、納得しない方もいると思います。ある意味では、全ての説明というのは循環論法です。全ての真理がトートロジーだということと同じようなことだと思います。

(1)に関して一番重要なのですが、これは、現在を実証的かつ論理的に記述することがまず大前提であります。そして、これは本質的なものであるということです。

例えば、人間の場合ですが、いろいろな固体間のインタラクション、相互行為を観察するにしても、どのレベル、あるいはレイヤーであるのか。そうしたレベルの設定というのは文化人類学でもやられているわけですが、その設定は、進化生物学、進化心理学でも、霊長類(生態)学でも、それぞれに、やや異なったものになってくるだろうと思います。

文化人類学というのはコウモリみたいなところがありますが、実は今日お話しになった進化生物学・進化心理学と霊長類(生態)学の間には、説明方法として非常に大きな差が

あるということを、今日はあらためて感じました。

ここから、文化人類学の話をしします。

普通に暴力と倫理、あるいは道德ということを考えて、私どもから見て、優れて現生人類特異的なことを挙げてみたいと思います。極め付きの人類特有性というものです。

それはここに書いておきました。読んでいただければいいのですが、自省と内面化、心的葛藤の問題、心の中の他者。これは心の理論、あるいは共感理論でも話に出てきましたが、その延長の後で、人類的なものとして、やはりスーパーエゴの発生と、それによる心的拘束であろうということです。あえて「神」とは申しませんが、いかなる形であれ、エゴを拘束するスーパーエゴの発生というのは非常に大きいということです。

山極さんも言われましたように、スーパーエゴというのは、基本的には原型的なイメージは父ですので、それは家族的な単位と共住共同体の重層性の中での優越的他者として出てくるものです。その他者の内面化というのは、あえてフロイトの議論に頼るまでもなく考えられることだと思います。そのようなところで、自己の中の他者というのは、さまざまな形で出てきます。そのいくつかの形態の中心にスーパーエゴというものがいると、私は思います。

つまり、自己の中で社会が形成されるということです。これは恥の観念でもあるし、場合によっては罪の観念の基盤でもあります。それが具体化するときのいろいろな多様性については、きれいに区分けできるというよりも、なだらかなグラデーションをもって彩られるものだろうと思います。

最終的には、人間社会というものを形成しているのは、ある種の信頼の在り方であろうと思います。人間的道德の根源は、その信頼であるということです。

そして、その信頼というのは、人間の場合にはとりわけですが、死者と過去の出現（に由来する）……死者と過去と並べたのは、私の考えているところ、過去というのは死者だからです。過去というのは、死者でしか現れません。とりわけその初発においては。

それと同時に、何かに負い目を持っていることによる、その未来における決済（というものがある）。今はしないけれど、いつかはきっと、あるいは、できるかなという。「私の生きている間に核兵器を廃絶できるだろうか」とオバマは言っていましたが、そうした未来の問題です。

暴力のイメージについて言えば、それは非常に肥大化するという問題です。社会の共同性が増すとともに、集団間の暴力が増すというふうに山極さんが指摘されましたが、確かにそのとおりだろうと思います。ピンカーの言っている、全体として人類史において暴力が減っている、殺人も減っているということは事実であっても、いったん起きたときの数的な膨大さというのは過去と全く違うわけです。

要するに母数が多いから、全体の割合としては減っていくかもしれませんが、やはり個々の個体の、死んだ個体の膨大な堆積というものが戦争では起きるわけですから、こうした肥大化の問題、また、さまざまな形で暴力の発現の在り方、それから、性にかからむ暴力性の問題等々が、われわれが考えなくてはいけない問題として出てきます。

その起源論としては、おそらく進化心理学ではある程度いろいろな分野の論理、たとえ

ば脳科学の知見を進化心理学的にまとめるに当って、現在見られる知見のさまざまな援用用途を論理的にまとめて(抽象化して)、現在の人間の在り方の起源を論じるという形になると思います。

それから、霊長類生態学の場合には、逆にさまざまな——人類を含む——霊長類の持っている、社会生活における暴力の共通性、あるいは、規範の共通性を上下方向的にたぐることによって、どの時点まで人間的な暴力、人間に特殊な規範というものにさかのぼれるかという論法を使ってくると思います。その点では、今日お話のあった二つの隣接諸科学の説明の方向性は、逆方向に近いものだと私は思います。

基本的に私どもが考えなくてはいけないことは、人類学者というのは人類の普遍性を考えます。がそれは大前提として、その上で細かい、細かい、差異というものにこだわるということです。その差異の在り方というものを説明し、解釈するというのが私たちの、基本的な、学問的な在り方だと思っております。

ですから、多様性を生み出す契機を問うのか、あるいは、全体の中で各部の作用、在り方を問うか。いずれにしても、現生人類の、現在の文化の中においてでも、そうした特殊性と特異性を探っていかなければいけないと思います。

その中でも、極めて特殊な倫理の形成と暴力の形態というのを、われわれは考えていく必要があります。もう、ほとんど文化人類学者もとうに忘れ果てた民族学的なトピックですが、例えば首狩りであるとか人身供犠とか、そういうものも、現在の政治暴力の多様な形態やら、性間暴力の諸形態と並んで考察する必要があるかと思えます。

これで用意したものは終わります。あとは次の議論のためのノートです。どうもありがとうございました。

(拍手)

(6) 総合討論

【司会】 内堀先生のほうから、二人の講演者に対する、文化人類学あるいは民族学の立場からのコメント、応答があったかと思えます。長谷川先生と山極先生のご研究、方法論に対しても、応答で内堀先生からコメントもありました。最後のほうでは、人類といっても、やはり多様性があるだろうというようなご指摘もあったかと思えます。文化人類学の立場としては、その多様性も理解していくことが大変重要であるということかと思えます。

この内堀先生のコメントに対して、まず長谷川先生のほうから何かコメントをしていたらと思うのですが、いかがでしょうか。

【長谷川】 現在のものから過去のことの成り行きを復元するということが非常に難しいのはそのとおりなのですが、今の進化生物学の一つの基軸は、いろいろなケースで分かる限りにおいて、ゲノムの分析によって、何万年前に分岐したとかということは、できる限り明らかにしています。それが可能になってきたということがあります。

例えばオキシトシンという、仲良しになったり優しくケアをしたりすることに関わるホルモンがありますが、そのオキシトシンの遺伝子を全部解析していくと、哺乳類の中のオ

キシトシンとバソプレッシンというものがどのように分岐してきて、それが、は虫類とか両生類だと、どこまでどう変化していて、結局は魚も昆虫もイノトシンという、ああいうものに行き着くわけです。

ですから、そういう共感の土台になるようなホルモン物質がどのように変化してきたかということは、単に類推ではなくて、ゲノムの分析から分かるようになってきました。そういう手法がすごく進んできたことは、この数十年、進化生物学が結構、様変わりしている一つの動因だと思います。

もちろん、それだけでもいろいろな事実を全部さかのぼることはできませんが、比較法と、そういうゲノム進化のことを組み合わせます。比較法の中には、今日は私のところではあまりお話ししませんでした。人間の子どもの脳機能のどういうところと、それに相当するネズミの脳のどういう機能とかいうことを比べるものがあるって、ネズミと人間の系統は遺伝子の解析で分かっているわけですから、その系統の中でどのように、そういう脳機能が保持されたり変化したりしてきたかということの道筋は、結構、事象的に分かりません。

そういうものを一生懸命使いながら、残っていないことに関する生態学的なものとか、いろいろなものの類推を含めて、なるべくプロージブルな仮説を立てていくということが基本です。それはそれでもものすごく面白いし、いろいろなことが分かってきたというのは、私はワクワクします。だからやっているわけですが、すごく楽しいです。

それから、今日は2行でおまとめになりましたが、私がワクワクして、すごく嬉しいと思っている最近の発見というのは、やはり人間が基本的に、赤ちゃんのときの、あの基本的なところで、社会的参照とか社会的随伴で腹側線条体、報酬系が活性化するというような、他者と触れ合い、他者とスマイルし合うことが本当に楽しいのだということから人間は生まれているということです。それは、性悪説ではないということが立証されたのだと思って、私はものすごくビビッドに感動しています。ちょっとそんな話をしました。

【司会】 では、次に山極先生のほうから、お願いします。

【山極】 文化人類学と、言うなれば社会科学と自然科学というのは、常に対立する傾向があります。社会科学は常に多様性を求めるんです。多様であることが自然であると考えます。そこから出発するわけです。出発点がまず違うということです。自然科学は、一見多様であるものの裏に、一般的な法則性を探そうとする学問です。

ですから、内堀さんがおっしゃったようなことになるのは当たり前なのですが、ただ、そこに私が思うのは、やはり起源神話というものがあるんですよ。起源神話が危険なところは、やはり起源というのの一つであると思うことです。

進化論というのは、そもそも分岐進化論ですから。チャールズ・ダーウィンは「祖先をたどっていけば共通の祖先に行き着く」と言いましたが、例えばチンパンジーなり人間なり、その祖先が持っている性質をいまだに保持している部分があるということです。ですから、何とか時間的に共通性を見いだそうとするわけです。起源は一つと考えるわけです。

そして、そこから見てみたら、今の人間は、あるいは他の動物でもいいのですが、いろいろに見えているようだけれども、均質な部分がありはしないかということです。その均

質の部分重要と考えるんですね。ですから、そこが、要するに文化人類学者、社会学者の、たぶんご不満なところで、「お前はその多様性を全く無視して、共通性ばかりを見いだそうとしている。そんなことはない。例外だっていっぱいあるじゃないか」と言われるわけです。

でも、その両方をどのように見ていったらいいのだろうと。特に、内堀さんにも指摘された暴力の多様性です。これは、要するに起源を一つのものとして考えられないことがあるわけです。集団間の暴力と性の暴力と、そして、集団内の暴力、親子の暴力、いろいろあって、これは起源が全然違うものだし、そもそも起源ということを考えてはいけないものかもしれないですね。そういうことを一緒にたにして考えるなどおっしゃるのは、もちろん、そのとおりなんです。

ですが、世界で起こっている出来事、あるいは人間の行いの多様性の中に潜んでいる共通性、あるいは法則性というものがあるというのが、われわれの、たぶん長谷川さんもそうだと思いますが、一致した立場であって、ここを主張したいというのは、学問の方向性なんですね。その違いが今日は明確になったかなという気はしています。

【内堀】 こういう議論になると、私は立場として困ることがあります。基本的に、私は長谷川さんの発想と山極さんの発想を持っているんです。ですから、文化人類学の中でも大変な鬼子なので、本当はここにいては良くて、もっと文化相対主義的な人がいたほうが良いと思いますが、今日はあえて文化人類学者として振る舞おうと思っています。

実際に、普遍的な意味を否定するというのは、もう今や誰もあり得ないのですが、その普遍的なものの探求から、どこまで多様なものを説明できるかという見極めは大事です。それから、これから進んでいく道は、おそらく霊長類生態学でも、あるいは進化心理学でも、あるいは文化人類学でも同じだと思います。

多様性というよりも個別的な属性と言ったほうが良いと思いますが、その境界のあたりをきちんと見極めていく学問的な作業が必要です。ですから、これは極めて実証的な仕事になるので、「普遍的なものが面白いからやる」、あるいは、「個別あるいは多様性が面白いから、こっただけやる」「これが自然科学と社会科学の違いだ」というのとは、違うと思うんです。

ついでに言うておきますと、私は「社会科学」という言葉が大嫌いで、常々「人文学」と言うておりますので、(言わずもがなとは思いますが) 私は人文学者です。

【司会】 ありがとうございます。それでは、私のほうから講演された先生方にご質問というか、お二人の発表の関連性みたいなものをご質問してみたいと思います。

長谷川先生のお話の中で大変面白いと思ったのは、物理的な痛みと社会的な痛みを自分と他人に対して感じる場所は同じだけれど、他人の社会的な痛みを感じる場所は別の部分であるということです。かなり示唆的で、人類が人類である何らかの飛躍があるとしたら、そのあたりなのかなと思います。それがコミュニケーションとか幻想とか、いろいろ他人を考えるイメージーションというのでしょうか、そういうものの発生なのかなとも思います。

もう一つは、自分が損をしたときに嫉妬するというのと、逆に自分が得をしたときの後ろめたさみたいなものです。人類学者は、例えば平等社会から首長制社会になったときに、首長とか長老がガバツと食料をたくさん、不公平に取るということはどういうことなのだろうというのを社会構造論的に説明したり、いろいろしますが、「でも、本音はね」というところもあります。その辺のところ、文化人類学に対して大変面白い問題提供をしていただけたかなと思います。

山極先生に聞いてみたいのですが、今の点、霊長類の研究からしまして、社会的な痛みみたいなものをゴリラやチンパンジーは感じているかどうか、先生のご研究からの見解でいいので、お話させていただきたいということと、先ほど言いました、自分が損をしたとき、得をしたときの、嫉妬とか後ろめたさ的なものというのは、類人猿でも観察されると考えていいのでしょうか。

【山極】 類人猿でも、これはサルも段階でも、不公平な立場に置かれたら不公平を是正しようとしてます。オマキザルもそうです。これは、あります。

それから、スカフォールディングとあって、類人猿の場合は、幼児が階段を下りているときに、幼児はその階段を下りる能力がないから、先に立って、それを手で支えてやろうとする、そういう他者の能力を予測して対処するような行動はあるわけです。

つまり、少なくとも相手が自分の知っていることを知らないということを理解する能力は、類人猿には多少はあるということは分かっています。でも、それはサルには、なかなかありません。そこが大きなギャップです。

もう一つ付け加えたいのは、今日、長谷川さんも私も「言語」というところで大きなエポックメイキングな境界を引いたのですが、でも実は、同調や共感はずっと続いている話であるというのが私の考えです。

つまり、共感というのは、脳と脳とがつながるということです。それ以前から、は虫類の段階、魚類の段階、逆にアメーバの段階から、仲間と同調するという行為は普遍的に見られる現象なんです。それが、だんだんと形を変えてつながってきたわけです。身体と同調というのとは形を変えて脳がつながるような仕組みが、要するに霊長類から人間へとやってきたということです。

言語というのは、言うなれば、すごく効率的な手段なんです。だって、それまでは身体を使って同調しなければいけなかったわけです。ところが、それをしなくて済むようになった。言葉だけでできるようになったし、しかもそれは時間を超えてつながることができるようになったわけです。

先ほど内堀さんが言った、「死者」というのもそうです。死者と同調できるようになったということです。これは「神がいなければ」とおっしゃいましたが、言葉があれば、それができるわけです。あるいは、シンボルがあれば、それができます。

それがどんどん広がっていき、いまだにそれをやり続けているんです。インターネットがそうじゃないですか。これも、つながるための仕組みなんですよね。ですから、そのつながることをどんどん拡大していることが、人類のもともと持っている動因みたいなものです。そこが、言葉によって非常にエポックメイキングに開けたのだけれども、その前か

ら、そういう動きは加速してきたのではないかという気がします。

【司会】 今度は山極先生のご講演の中で、最初に恥と罪のお話があったかと思いますが、恥はどの民族でもあるが、罪は見られないということでした。

罪の場合は、おそらく自分自身に対して罪の意識を持つということと、他人がやったことに対して「罪だ」とみんなで言うというようなことと、両方あるかと思うのですが、長谷川先生にご質問したいと思いますのは、先生がご指摘になった社会的な痛みを感じるか感じないとか、あるいは自分が損したとき、得したときの気持ちみたいなものと、恥と罪の考え方というのは、何かつながるものがあるのでしょうか。

【長谷川】 目の前にある物に対して、自分が1個で相手が4個で、不平等で不満があるということは、本当に今、山極さんがおっしゃったように、系統的にはすごくさかのぼれます。それで、類人猿でもない、オナガザルでもない、もっと分岐が遠い、南米にいるオマキザルの仲間を実験をして、石を1個、サルが実験者にあげると、キュウリがもらえるというのをやっていました。

ある日、スルスルと隣の部屋との境界が開いて、隣は、同じように石を渡すとブドウがもらえているということが分かったら、キュウリをもらっていたほうがすごく怒って、キュウリを実験者に投げ返したんですよ。それで、隣を見ながらバンバン床をたたいたりして、それはビデオでありますから、ネットで探すと見られます。そういうこともあります。

それはもっとさかのぼれます。トリで、オウムでやったものか何か、そういうのもあって、かなりさかのぼれます。ですから、そういう目の前にある、比較できるものに関する不平等感というのは、系統的にはかなり昔からあると思います。

あと、社会的な不平等感とか、社会的に自分のほうはいいけれど相手は良くない状態で、どうしようということの慰め行動です。喧嘩をして負けたほうに対して第三者が慰めに行くかというので、ブドウとキュウリの実験をしたフランス・ドゥ・ヴァールという人は「類人猿は慰めをする」と言っているのですが、すると思いますか。私は、あれはかなり怪しいと思っています。

【山極】 チンパンジーには **Reassurance** という行動があって、喧嘩した後に勝ったほうが負けたほうを慰めに行くということになっていますよね。

【長谷川】 だけれど、あれはみんな、負けたほうが自分より順位が上ですよ。自分より順位が下のやつがたたかれて負けたときに、順位が上のものが慰めに行くことはないと思います。

なので、ドゥ・ヴァールの主張は括弧付きで、私はやはり、そういう順位関係とか何かを無視して、本当に悪い状況にある人を慰めてあげるとするのは、人間固有ではないかと思うんです。

それから、私たちの弟子筋の人がやった実験で、そういう順位と関係ない慰め行動を子どもがいつからやるかといったら、やはり2、3、4歳ではできなくて、5、6、7歳あたりから、はっきり慰めをやるようになるので、やはり自分に起こったことのシナリオと他人に起こったことのシナリオを突き合わせて、「もし自分だったら」というシナリオを作るなんていうことは結構難しい話で、それは類人猿の脳では、もしかしたら結構ハードルが高

いです。

子どもでも、自己と他者というものの理解が進んで、自己シナリオ、他者シナリオ、「もし私があなただったら、しないよ」みたいなことができるようになるというのは、結構難しいのではないかと思います。

それで、だんだん共感する相手の範囲を拡大するというのも、昔はペットのイヌやネコを本当にかわいがるなんていうことは思ってもいなかったわけです。イヌは外にいてとか言っていたのが、イヌのお葬式までするようになったというのも、社会的な環境の中で、そこまで拡大をしたわけですね。

女性とか奴隷とかいうのも、全然何とも思っていなかった時代もあったので、どういう境界でヒトをケアするかということは、前頭葉だから、状況と社会によって何とでも境界が引けるのではないかと思うんです。ですから、内集団、外集団と言うけれど、内集団というのは何かといたら、それは何とでも引けるのではないかという気がしています。

【内堀】 議論が細かいところになってきたので、やや細かいことも話していこうと思います。

慰め行動ですが、最近、南米のサルで見つかっていると聞いたことがあります、私もうろ覚えですので、仮にそうだとします。ドゥ・ヴァールによる発見に対する批判というのは、もうかなり前からあって、それは分かるのですが、仮に、霊長類の中ですが、人間とはかなり離れたところに慰め行動があったとします。事象的にきちんと見つかったとします。その場合に、霊長類に非常に古い段階から慰め行動があったと見るのか、あるいは、別個に発達したと見るのかという議論は当然出てきます。そういうことが、ちょっと後でお聞きしたいことがあるのですが、そうした議論はゲノムの場合には多々あると思います。

私は過去を類推すると言ったのではなくて、推論すると言ったのですが、推論というのは、きちんと論理的に詰めていくということで申し上げたつもりです。そうした、詰めた後につくられた一つの仮説をもって、再び現在のわれわれ人間の状態を説明するというのは、いい意味で循環論法だということです。だけれど、それは当然、あってしかるべきことだと私は思います。

ゲノムのことに関しては、おそらく山極先生よりも長谷川先生のほうがまだご専門だと思いますが、実は山極先生が言われた、言語の発生が一応 20 万年ぐらい前という、現世人類と大体イコールにされたと思います。そして、脳の大型化というのが、ほぼ 50 万年前とおっしゃったわけですから、ネアンデルタールに比定されておっしゃったのではないかと思います。

いわゆる言語遺伝子というものをどう見るのか。これも循環論法になると思いますが、ネアンデルタールに言語遺伝子があって、現生人類にはもちろんあるわけですが、そういうものがあるから、ネアンデルタールに言語があったと言うのか。あるいは、言語遺伝子というものは、それこそ類推であって、そういうものから言語は説明できないと言うのか。どちらなのでしょう。

【山極】 長谷川さんの前に私から。先ほどの、慰めという話にちょっとだけ補足したい

のですが、「Other-regarding behavior」というのを日本語で「慰め」と訳すと、これは間違いです。

慰めというのは、苦悩している、あるいは窮地に陥っている、あるいは怪我をしている個体に対して、それを元気付けるような行動をすることが慰めで、これがチンパンジーにあることが疑われています。つまり、傷付いた個体を舐めたとか、抱いたとかいう行動を基にそう言っているわけですが、それが頻繁に起こるわけではありません。非常にまれにしか起こらないということです。

ただし、「Other-regarding behavior」というのは、他者のためになろうと思って、他者の利益になるような行動をしてあげることなんです。ですから、いたわることではないので、ちょっとここは線を引く必要があります。「Other-regarding behavior」は、南米のサルにも非常によく見られます。

それから、脳の大きさは、ホモ・ハイデルベルゲンシスという、ネアンデルタールとホモ・サピエンスの共通の祖先のところでも、現代人並みの大きさに達しているわけです。でも、それがどう変わっていったのか。ネアンデルタール人は現代人よりも、むしろ大きい脳を持っていたわけですから、それがどう使われていたか、言葉としてどう反映されていたかは分かりません。

ただし、言語について言えば、言語というものをどのような機能と見るかなのですが、私は、それは考えを外に出すことだと思っています。つまり、目に見えないものを形にする。ですから、そのシンボルとなって現れるわけです。絵になって、芸術になって現れるわけですし、そういうものが言語の一番大きな機能、役割だと思います。それが出てくるのは、やはり数万年前なんです。

ですから、言語としての遺伝子は持っていたかもしれませんが、言語の発生と言うには、やはりネアンデルタール人はちょっと厳しいのではないかと思います。

【長谷川】 言語遺伝子とおっしゃっているのは、FOXP2 ですか。FOXP2 は何をしているか、結局よく分かりません。

FOXP2 は海綿にもあるんですけど。いろいろ、発生のときの内胚葉とか何とか、ああいうところの、どの部分をどう造るということに関係している遺伝子なので、もしかしたら、喉の構造に関わっているかもしれません。

ですので、喉の構造がこのようになって、舌が可動的に、すごくよく動くようになり、口腔が音を拡大させたり何かする、ふいごみたいになり、それで、飲み込むこととしゃべることが同じところで行えるようになります。だから、詰めて死ぬこともあるのですが、そういう機能を果たせるようになるという、喉の筋肉とか何かの発生前に FOXP2 は関わっていたかもしれません。

FOXP2 は、ネズミと比較すると何個か違うけれど、人間とチンパンジーでは2個違うという、すごく急速に、ここ 600 万年で進化したことは確かなのですが、失語症とか、いろいろある家族が、そこがちょっとおかしいというのはあるので、何らかは関わっているけれども、何をするかは分かりません。

それで、FOXP2 のバージョンが人間、ホモ・サピエンスのバージョンと同じだったとい

うことは、ここら辺の造りは同じだったと言えるかもしれません。

例えば、ライオンは怖い動物だと言えるか。「ちょっと、あんた、もう行ってよ」と言えるか。それと、「あの岩の向こうにある木には、もうすぐ、今ごろだと実がなっているはず」と言えるか。

でも、それは環境に関する情報ですよ。有用な情報です。だけれど、そんなことばかり言っているのではなくて、本当に「今日はいいお天気ですね」とか「秋になりましたね」とか「このお花はピンク」とか、先ほどの「あ、キクマルちゃんだ」とか、そういう、世界のただの描写、「それで何なんだよ」ということが、すごく人間は楽しいでしょう？ というようなことをネアンデルタールが言っていたかどうかは分かりません。(笑)

【内堀】 山極さんのおっしゃることは、非常に言語の本質というか、本質的な二側面に関わることです。言語学の初歩をやられた方は皆、一般的にも分かるわけですが、コミュニケーションの手段として言語を見るか、あるいは内面の、極端な話、思考の発達と言語の関係を見るかで、全く言語観が違ってくるわけです。実際には両方あるわけですが、どちらを中心に、人間的な言語の本質と置くかによって、おそらく起源に関する思考法も違ってくると思います。

社会性からずっと進めていけば、一般的にはコミュニケーションのほうから言語を語っていくようなことになるわけです。今日も、山極さんも最初はその言い方をされていたわけですが、先ほどは、極めてチョムスキー的なことを言われて、本当に内面を外に出すことだということをおっしゃられたわけです。実際には二つあるわけです。ただ、どちらを本質的と見るかということが問題だと思います。

そして、ご参考になるかどうか分かりませんが、5、6年前に出たアメリカの人類学の教科書に、進化に沿ったチャプターがあって、ネアンデルタールのところは、副題に「Talking apes」と書いてあるんです。ホモ・サピエンス、現生人類のところは「Symbolic apes」と書いてあります²。「Talking」と「Symbolic」というのは、まさにコミュニケーションと内省、思考に関わる場所であって、おそらく山極さんがおっしゃったこともそういうことだろうと思います。

非常に大事なことで、おそらくゲノム遺伝子というのも相当変なものだなと思っていましたが、その変なものさを長谷川さんにちゃんと指摘していただいたので、ありがたい次第です。

一つだけ山極さんに伺います。(本年)3月末の『Nature』に、トゥルカナ湖畔で27体の、女子どもを含む、ほぼ1万年前と想定される人骨が出てきたという、原始の大虐殺という、随分センセーショナルなことが書かれていました。女子どもの死体が出てきているというのは、暴力的には非常に意味のあることです。例えばチンパンジーであれば、ほとんど雌、子どもは殺さないわけですか。集団間の場合も。

【山極】 殺しますよ。

【内堀】 そうですか。いずれにしても、全部で27体が出てきたのと、おそらく、1万年

² Matt Cartmill & Fred H. Smith 2009 *The Human Lineage (Foundation of Human Biology)*, Wiley-Blackwell.

というのは微妙な年代ですが、少なくともトゥルカナ、ケニアの北部においては、まだ農耕は来ていないであろうと思います。ですから、農耕による生業変化による前の集団間の、当時の人口から見れば、本当に大虐殺があったとされるのですが、そういうことはどのようにお考えでしょうか。

【山極】 年代的には1万年前ですから、大体、私の話と合うのですが、農耕の起源と言うと、また怒られるのですが、いろいろな仮説があります。たぶん一番、環境要因として重要なのは、6万年ぐらい前から世界規模の気候変化が非常に頻繁に起こっています。特にエルニーニョ、ラニーニャみたいなことがどんどん起こって、植生が随分変わったということです。

それに応じて、人口密度も随分変化しています。定住や移動が繰り返されて、それは地域を問わずそうだったということです。とりわけ、人類がいたイスラエルからエチオピア、トルコあたりについては、それが非常に頻繁に起こったと環境学者が言っています。

そのときに何が起こったのか。単に狩猟や農耕という生業様式だけでは語れない、人類社会の組み替えや新しいチャレンジというものが起こったはずなんです。当時の人類の生き方は環境に非常に左右されますから。現代でも難民が生じたのは環境要因だということを、知っている人は皆、知っています。

ですから、そういう飢餓や、非常に豊穡な時代が交代して起こって、それに応じて人間の集団が随分組み替えられたということです。そのときに、おそらく食糧の蓄積等も起こってきたと思います。そういう証拠がこれからどこまで出てくるか分かりませんが、その中で集団間の敵対性が高まったということはある得たと思います。

ただし、そこまで集団間の敵対性を高めることが人類同士の殺害に至るとするのは、明らかに何らかの社会に対する意識の変化がなければならなかったという気はしています。

【司会】 一つ、長谷川先生が解説されている『道徳性の起源』という本を私も拝読したのですが、あの中で、例えば狩猟採集民、イヌイット族とかの中で、いわゆるフリーライダーというか、ずるをする人とか、あるいは突出する人に対して、いかに押さえるかという、あの辺に対して先生のご見解をお伺いしたいと思います。

【長谷川】 あれはすごく面白いと思います。進化生物学の、いわゆる行動生態学だったら、ただ乗りをする人、フリーライダーとか、嘘つきとか、そういうものというのは、絶対に排除しなければ、その互酬性、互惠的利他主義のシステムは崩壊するんですよね。ですから、それは絶対に、即その場で排除するような行動しか進化しないはずですよ。

それを単にモデル化して、数理モデルですとやっていったのが「Tit for tat」というものです。「やられたらすぐやり返す」という、そのやり返すということをしなないと、そういう裏切りがどんどん侵入してくるということがシミュレーションで明らかになっているわけです。

それで、あのシミュレーションですごく面白かったのは、フリーライダーをされたら即返しをするということをしなと、いつでも協力的に振る舞う「ALL-C」、いつでも Cooperate、Cooperate、Cooperate だけで、いくらぼったくられても怒らない「ALL-C」が増えていくと、必ず「ALL-D」になるということです。「どんなときでも、ぼったくって

やる」というのが侵入できるんです。

ですから、本当にちゃんと「Tit for tat」で見分けて反撃をする人がいても、そこにある程度の「完全お人良し」がいると、絶対に「完全ぼったくり」が入ってくるということですよ。それで、「ALL-C」、お人好しというのは、自らは人を傷付けられないかもしれないけれど、本当に社会に悪い種をまくわけですよ。

そういうシミュレーションモデルでは全部そうなるのですが、実際のいろいろな狩猟採集民の社会というのは結構、「ピルフェーリング」と呼ばれている、自分は全然狩猟採集に貢献しないのに、いつももらってしまうという人が必ず許されているんです。

そして、南米のアチェの研究をしている人たちが言っていました、男たちの中の何%かは、一生に一度も狩りに行かなくて、いつも狩りに行くときになると、「矢が壊れているから今日はできない」とか「子どもが病気だから行かない」とかいうことを言って、一度も狩りに参加したことの無い男がいるんですって。それでも、やはりみんな分けてもらえるし、みんながポンポン怒るから多少減らされるのだけれども、完全排除はしないんですよ。

誰であれ、たとえその人が狩猟に貢献しなくても、どこかで、子守をするときに何かをやってくれるとか、病気のときに薬草を探してくれるとか、別の次元での何かがあるのか、一緒にいて数が多いほうが、やはり他のことがあったときに有利になるとみんなが思っているのか、何か「Tit for tat」モデルが考えているような形での完全な排除というのは、人間はしていないんですよ。

それは、私は本当に、人間の共感性だとか、シナリオをいっぱい考えて比較する能力とか、そういうこととすごく深く関連していて、ああいう単純な理論モデルからは出てこないものなのではないかと思っています。

【司会】 山極先生、今の話に、先生のほうからのコメントがありますか。

【山極】 ただ乗りに関しては、今、例えばアメリカのゲノムをやっている人たちだとか、先ほど紹介したボームという文化人類学者が言っているのは、私は賛成はしていないのですが、こういう考え方です。

つまり、サイコパスみたいな遺伝的な疾患がある人というのは、人類には一定パーセント程度いるというんです。それはもう他人の痛みが分からないから、自分に利益があるように振る舞うけれども、道徳規律があって、死刑とか刑務所に入れられるとか、そういうはっきりした罰が与えられるから、やらないでいるのだということです。

放っておけば出てくると。それをたたかないと、人間社会はめちゃくちゃになってしまうということです。ですから、一定程度の罰は必要だという考えです。

これは、例えば最近のゲノム科学で、人類の有効集団は、有効集団というのは子孫を残すことに貢献したもともとの個体数のことを指すのですが、チンパンジーとかゴリラに比べて、人間は5分の1から10分の1ぐらい小さいという話です。

今、人間は70億いるわけですが、チンパンジーは全世界で30万ぐらいしかいないんですよ。だけれど、チンパンジーの遺伝的多様性のほうが、人類の多様性よりも圧倒的に高いんです。それは有効個体数が多かったからだというわけですよ。

つまり、人間はボトルネックを経験して、そのときにドーッと人口を減らしてしまったということです。それを多産性によって急速に増加させてきたと思うのですが、その結果として何が起こったかという、これがサイコパスに関係すると思います。

本来ならば自然淘汰されてしまう病気、例えば、てんかんとか子宮内膜症とかエイズとかいう病気はチンパンジーには起こらないわけです。それは淘汰されてしまっているからです。でも、本来は淘汰されるべきそういう性質が、ボトルネックを経たおかげで生き延びてしまったということです。

それが今、人間を苦しめています。それは単に病気に限らず、精神的な疾患にも表れているというのが、一部というか、今はドミナントかもしれませんが、アメリカの学者の大きな潮流です。サイコパスもその一つです。

ですから、ある程度、人間の行いにはどうしようもないところがあって、それはもうとにかく、要するに罰則を持った社会の規律によって押さえていくしかないのだという考えで、暴力もその一つだと言っているわけです。

今日は、私は集団間の暴力を問題にしましたが、いろいろな多様性があります。性犯罪、親子の犯罪、それから詐欺。そういった、いろいろなことに伴う暴力が絶えないのは、そういう遺伝的疾患のある人たちがかなりの率を占めているという考えが根底にあるわけです。

ですから、そのことを、もう文化人類学者までも言い始めている時代であるということ、最後に申し上げておきたいと思います。

【司会】 ありがとうございます。人類の道徳性あるいは共同性を守るために、例えば罰とか、強制的に牢屋に入れるとか、あるいはもう死刑をするとか、そういうものが表裏一体といいたいでしょうか、切り離せないといいたいでしょうか。今回のシンポジウムの「道徳性と暴力性」の、別の一つの、ある側面の深い問題が最後に出てきたのではないかと感じております。

会場の皆さまも質問されたいことがたくさんあるというのは重々承知なのですが、この後、懇親会も用意されておまして、一応このシンポジウムは6時をリミットにしております。

今日のこのシンポジウムに関しましてはテープ起こしをして、南山大学人類学研究所の『年報人類学研究』に、次号(第7号)に掲載する予定にしておりますので、その辺もご期待いただきたいと思います。

長谷川先生、山極先生はこの後の懇親会にご出席されるということですので、もしお時間がありましたら、その懇親会の席でも質問等していただければと思います。

では、長い間、どうもありがとうございました。